

# 「瀬石アンドロイド」プロジェクト 2025年度 瀬石アンドロイド研究会 活動報告書及び台本集



二松學舎大學  
NISHOGAKUSHA UNIVERSITY

# Contents 目次

---

	<b>活動報告</b>
04	漱石アンドロイドの9年間 二松学舎大学文学部都市文化デザイン学科 准教授 谷島 貴太
06	漱石アンドロイド不在のサークル、最後の一年 二松学舎大学大学院文学研究科 助手 関 祐紀
09	大阪・関西万博視察レポート 二松学舎大学漱石アンドロイド研究会 文学部国文学科 山根 胡桃 文学部国文学科 田中 詩織 大学院文学研究科 助手 関 祐紀 文学部国文学科 池尻 瑠菜 文学部国文学科 池田 花梨 文学部国文学科 田中 真琴 文学部国文学科 野口 里生菜 文学部国文学科 濱田 陽菜
21	<b>台本集</b> ・「きみとロボット」 出展&朗読 (2022/3) ・附属高校向け授業 (2022/12) ・オープンキャンパス (2023/8) ・シンポジウムオープニングパフォーマンス (2024/3) ・文学入門「夢十夜」朗読 (2024/6) ・漱石山房「三四郎」朗読 (2024/10)
35	<b>漱石アンドロイドグッズ&amp;イラスト集</b> イラスト・フライヤー・LINEスタンプ
37	<b>漱石・門弟プロフィール帳</b> はじめに ・夏目漱石 ・森鷗外 ・正岡子規 ・寺田寅彦 ・鈴木三重吉 ・小宮豊隆 ・菊池寛
45	<b>おわりに</b> 研究会メンバー・助手・スタッフ コメント

# 漱石アンドロイドの 9 年間

二松学舎大学文学部都市文化デザイン学科

准教授 谷島 貫太

## 1. プロジェクトの発足から漱石アンドロイドの完成へ

「漱石アンドロイド」プロジェクトは、学校法人二松学舎の創立140周年記念事業として構想された。二松学舎でかつて三島中洲のもとで漢学を学んでいた夏目漱石は、2016年に没後100年、2017年に生誕150年という節目を迎えており、本プロジェクトはこの二つの記念年を背景として立ち上げられた。このプロジェクトは、夏目漱石という文豪のアンドロイドを、単なる展示物や記念的モニュメントとしてではなく、教育・研究・社会実践を横断する研究基盤として位置づけた、という点に大きな特徴があった。漱石をアンドロイドとして再現することを通じて、教育現場での活用、文学研究・人物研究の新たな手法の開拓、さらには人間社会におけるアンドロイドの受容や意味づけを検討することが、当初からプロジェクトの目的として掲げられていた。

制作および研究は、二松学舎大学大学院文学研究科と大阪大学大学院基礎工学研究科による共同研究として進められた。これは、私立大学の文系研究科と国立大学の理系研究科が、対等な形で長期的に連携するという、当時としては比較的稀な研究体制であった。技術的監修は大阪大学の石黒浩研究室が担い、アンドロイド研究の知見が導入された。一方、人文学的側面では、漱石研究を専門とする二松学舎側の研究者が中心となり、漱石像の検討、発話内容の選定、教育的活用の設計などが進められた。さらに、漱石のデスマスクや写真資料を所蔵する朝日新聞社、音声データ作成に協力した夏目漱石の孫である夏目房之介氏、アンドロイド製作を担う専門企業など、多数の外部協力者が関与した。

こうした体制のもと、漱石アンドロイドは2016年12月8日に完成し、同日に完成披露記者会見が行われた。これをもって、プロジェクトは構想段階から実運用段階へと移行する。

## 2. 教育・研究実践としての展開（2016–2019年）

完成後の数年間は、漱石アンドロイドの教育的・研究的可能性を具体化する時期であった。大学や附属校での授業、朗読講義、式典でのスピーチなどを通じて、アンドロイドは教育現場に継続的に組み込まれていった。また、学生が運用に関与する体制も整えられ、サークル活動を通じた実践的関与が進められた。

こうした実践の蓄積と並行して、漱石アンドロイドをめぐる理論的・社会的問題を正面から扱う公開イベントが企画されるようになる。その第一弾となったのが、2018年8月に二松学舎大学で開催されたシンポジウム「誰が漱石を甦らせる権利をもつのか？——偉人アンドロイド基本原則を考える」であった。このシンポジウムでは、漱石アンドロイドを用いた演劇作品の上演（『手紙』、脚本／演出：平田オリザ）が行われると同時に、アンドロイドによって歴史的人物を再現することの意味や限界、人格権や著作権の問題、さらには「偉人」を誰がどのような根拠で再現しようのかといった問いが、多角的に提示された。ここでは、技術的可能性そのものよりも、アンドロイドという存在が社会に投げかける規範的・倫理的問題が前景化していた点に特徴がある。このシンポジウム議論の成果は、『アンドロイド基本原則』（日本工業新聞社）として書籍にまとめられた。この書籍は「故人をアンドロイドとして甦らせる権利」をめぐるガイドラインを提起しており、現代社会におけるアンドロイド活用のための一つの足場を提供している。また同書に収められた文章の一つは高校生向けの国語の教科書（三省堂『精選 現代の国語』）に収録され、高校生たちにアンドロイドをめぐる現代的な問いを投げかけている。

翌2019年には、「アンドロイドに魂は宿るか？——漱石アンドロイドをめぐる3つの視点」と題するシンポジウムが開催され、前年度の議論を引き継ぎつつ、問いの焦点はさらに内面性や物語性の問題へと展開していった。2018年のシンポ

ジウムが、権利や正当性といった外在的・制度的な論点を強く打ち出していたとすれば、2019年のシンポジウムでは、アンドロイドが語る言葉を人々はどのように受け取り、そこに「人格」や「魂」を見いだしてしまうのか、という受容の問題がより明示的に扱われた。両者を通じて、漱石アンドロイドは、単なる研究対象ではなく、社会的想像力を刺激し、議論を誘発する装置として位置づけられていった。またシンポジウムに合わせて、虚構と現実の境界をテーマとした、漱石アンドロイドのモノログによる演劇作品（『Variable Reality（ヴァリアブル・リアリティー）—虚構は可変現実』、脚本：佐藤大）も上演された。

これらのシンポジウムは、プロジェクトを内向きの研究活動に閉じるのではなく、アンドロイドという存在が生み出す問いを社会に向けて開き続ける役割を果たした。漱石アンドロイドは、そこで語られる内容以上に、「なぜそれを語らせるのか」「誰がそれを許可するのか」「それを聞く私たちは何をしているのか」といった問いを、繰り返し浮上させる媒介となったのである。

### 3. プロジェクトの深化——コロナ禍と生成AI（2020–2024年）

2020年度以降、プロジェクトは新型コロナウイルス感染症の影響を強く受けることになる。式典や対面授業の中止・縮小により、従来型の活用は制限されたが、その一方で、オンライン形式のイベントや映像コンテンツを通じた活用が模索された。

この時期には、渋沢栄一アンドロイドとの共演、オンライン講演、展示への長期出展など、従来とは異なる形での社会的接続が進められた。特に、日本科学未来館での特別展への出展は、漱石アンドロイドを学内利用にとどめず、広く一般社会に開く試みとして位置づけられる。研究面では、アンドロイドがもたらす存在感、記憶、メディア性といったテーマが、人文学・認知科学・ロボティクスの交差点として検討され、文理融合研究としての輪郭がより明確になっていった。

プロジェクト後期には、生成AIや大規模言語モデルの急速な発展という新たな状況が背景として現れる。漱石アンドロイドをめぐる議論も、アンドロイドとAI、虚構と実在、作者性と人格といった問題へと接続されていった。

こうした背景を受けて開催されたのが、シンポジウム「ロボット学者はなぜ小説を書くのか？——漱石アンドロイドと人間学としてのロボット研究」である。2024年3月に二松学舎大学にて開催されたこのシンポジウムでは、プロジェクト初期に前景化していた権利や倫理、社会的正当性といった問題系から一歩踏み込み、ロボット研究と文学創作との関係そのものが問い直された。

シンポジウムに登壇した、アンドロイド研究の第一人者である石黒浩と、人間の知能の創発を構成論的ロボティクス研究を通して探求してきた谷口忠大は、ともにアンドロイドをテーマとした小説を執筆、刊行しているという共通点を有していた。なぜロボット学者がみずから小説を書くのか、という問いを起点としたこのシンポジウムでは、ロボット研究が必然的に人間観や社会観を伴う営みであること、そしてその問いを掘り下げる過程で、論文や技術報告とは異なる表現形式として小説が要請されてきたことが示されていた。石黒、谷口のいずれもが、ロボット・アンドロイド研究の出発点に「人間とは何か」という根源的な問いを据えており、小説執筆はその問いを思考実験として展開するための一つの方法であると位置づけられていた点が印象的であった。

また、シンポジウム全体を通じて、ChatGPTに代表される生成AIの急速な進捗が、いわば通奏低音のように議論の背後に流れていた。AIが文章や物語を生成することが現実のものとなりつつある時代において、あえて人間である研究者が小説を書く意味とは何か、という問いは、ロボット研究の内部にとどまらず、語りや物語の主体をめぐる問題として共有された。

### 4. まとめ

本稿で振り返ってきたように、「漱石アンドロイド」プロジェクトは、記念事業として出発しながらも、教育・研究・社会実践を横断する長期的な取り組みへと展開していった。完成後は教育現場での継続的活用を通じて実践知が蓄積されると同時に、シンポジウムや演劇を媒介として、権利や倫理、人格、物語といった問いが社会に向けて開かれてきた。コロナ禍や生成AIの登場といった環境変化の中で、プロジェクトはアンドロイドをめぐる人間理解そのものを問い直す場へと深化していった。生成AIの急激な発展が、人間とは何かという問いを技術的な現実として日々突き付けている現代の状況において、このプロジェクトがたどった足跡は、これからわたしたちが踏み固めていかなければならない道筋を描き出しているはずだ。

# 漱石アンドロイド不在のサークル、 最後の一年

二松学舎大学大学院文学研究科

助手 関 祐紀

## 「漱石先生」不在のサークル

昨年度をもって、本学と大阪大学による漱石アンドロイド共同研究プロジェクトは終了し、それに伴い学生サークルも解散する予定であった。しかし、多方面からの温かいご支援と働きかけにより、活動を一年間延長する機会を賜った。ここに記して、関係各位に心より御礼申し上げる。

本年度は、活動の成果と運用の知見を将来にわたり参照可能な形で残すことを目的に、漱石アンドロイドの活動記録を恒久的に保存する「漱石アンドロイド台本集」の制作に取り組んだ。あわせて、本学文学部谷島貴太准教授の紹介により「Zine & Book フェス in 神保町」へ出展し、台本集の一部を抜粋したZINEを先行頒布版として頒布した。さらに、大阪・関西万博で展示されていた漱石アンドロイドの視察も行い、展示環境や来場者の反応を確認するとともに、今後の記録・発信のあり方について検討を深めた。

以下では、①大阪・関西万博における展示視察、②「漱石アンドロイド台本集」制作と先行頒布版ZINEの取り組みの二点について、活動報告を行う。

## 万博視察について

私たちは、大阪・関西万博において展示されている漱石アンドロイドを視察し、展示環境と来場者の受け止め方を現地で確認する機会を得た。視察は2025年9月8日から10日にかけて実施し、中心となる視察日は9月9日である。参加者は助手の院生1名、学部4年生6名、2年生1名で、人文学徒の立場からパビリオン「いのちの未来」を視察し、今後の研究・活動に活かすことを目的とした。とりわけ、漱石アンドロイドが石黒浩教授のシグネチャーパビリオン「いのちの未来」(ゾーン2)において、どのような意図と演出のもとに配置されているかを把握することが主目的であった。

実際の展示空間では、上下左右の至るところに複数のアンドロイドが配置され、視線を巡らせた瞬間に圧倒されるような構成が採られていた。音響は高級感があり、照明も展示を際立たせるように設計され、アンドロイドの近未来的な雰囲気強く喚起させる役割を担っていた。また、会場は余裕のあるスペースと明確な動線を備え、エスカレーターやエレベーターも整備されたバリアフリー環境であることも、「近未来」である。大人気のパビリオンという前評判の通り、来場者は熱心に食い入るように展示を見つめ、立ち止まる人も多かった。

さて、漱石アンドロイドは、特段の個別説明が前面に出る形ではなく、洋書がずらりと並ぶ本棚の前で、机の上に身を置き思索しているような様子で鎮座していた。さながら新作を執筆しているかのような演出であり、私たちが普段行う「朗読」「解説」「レクリエーション」を中心とした提示とは異なる仕立てであった点がとりわけ興味深い。さらに、バルブユニットと思われる機材が旅行鞆に見えるようカムフラージュされており、メタ的な装置としての要素を生活的な意匠へと読み替える工夫が見られた。こうした演出は、夏目漱石という人物像が一義的ではなく、見る者によって異なるイメージとして捉えられていることを示していたと言える。

また、パビリオン全体の運用面では、音声や映像による解説を伴いながら展示を鑑賞し、順に部屋(ゾーン)を移動していく形式であった。出入口などにスタッフも配置されていたが、基本的にはアンドロイドが案内を担い、来場者はガイドに導かれつつ物語世界を体験する。携帯端末が渡され、音声ガイドに近い形で案内に利用された点も特徴的である。記録面では撮影の制約が少なく、写真・動画・メモを十分に残すことができた。

今回の視察を通じて、想像以上に多数のアンドロイドが高いクオリティで展示されていることに驚かされたと同時に、

大阪大学をはじめ、石黒教授が関係する研究施設等のアンドロイド技術の蓄積を具体的に理解する機会となった。漱石アンドロイドは空気圧で動作するが、会場ではより可動域が豊富なアンドロイド、自律的に振る舞うアンドロイドも提示されており、今後の可能性を強く感じた。また、2075年の未来を舞台にアンドロイド（機械）と人間の境界を問うストーリーは、一般に自明とされがちな「人間とは何か」を問い直す人文知の観点からも示唆に富んでいた。

今回の視察を経て、普段関わっている漱石アンドロイドが晴れ舞台に立っていることを素直に嬉しく感じるとともに、人文と工学の融合が拓く今後の展開に期待を抱いた。私自身も、その延長線上で役に立てる形を模索していきたい。

### 「漱石アンドロイド」を継承する

本年度の主要な取り組みとして、「活動報告書及び台本集」の制作と、その先行頒布版ZINEの制作・頒布を行った。台本集制作は2024年3月に着手し、現在も継続している。先に述べたとおり、漱石アンドロイドが大阪・関西万博に展示されることとなり、本学から移送されたことで、従来のように学内外でイベント運営を重ねる活動形態は難しくなった。そこで代替の活動として、これまでの漱石アンドロイドの発言と運用の蓄積を記録し、将来の後輩や関係者が参照できる形で後世に残すことを主目的に据え、台本集という成果物へ収斂させる方針を立てた。

制作体制はサークル全員で行った。助手は全体の進行と意思決定を担うのみで、あくまで学生主体の制作体制を整えた上で、本学企画・財務課、広報課、そして谷島貴太准教授に監督・助言をいただきながら進めていた。なお、収録対象は朗読台本に限らない。司会との掛け合い、ささやかなレクリエーションなど、現場の運用を成立させてきた言葉も「発言」として扱い、可能な限り当日の写真も添えて文脈ごと残すことを目指している。一方で、アドリブの応答は対象外とし、収録する漱石アンドロイドの発言は当時の台本および音声データに忠実であることを編集原則とした。作品引用については、原則として岩波書店『定本 漱石全集』（2006年12月～2018年2月）を参照し、これらに依拠する方針を定め、資料としての信頼性を確保している。

素材収集は、サークルPCに保存されたテキストデータ、当日台本、記録映像からの文字起こしなどを突き合わせて行った。しかし過去の反省として、ファイル管理が杜撰であった時期があり、散逸したデータの回収と統合には相当の手間を要した。それでも、サークルの学生が分担して発掘・照合を進め、可能な限り網羅することに努めた。章立ては、活動報告、台本集、制作したグッズ・イラスト・フライヤー等の周辺制作物等で、発言を単独の台詞としてではなく、活動全体の実践として整理する方向で検討した。

一方、対外的な発信の場を確保し、制作途中でも広く関心を喚起するために先行頒布版ZINE『吾輩はアンドロイドである 特集：漱石アンドロイドのすべて』を制作した。ZINEは2026年1月に発行し、1月18日・19日に出版クラブホールで開催された「Zine & Book フェス in 神保町」にて頒布を行った。谷島准教授の紹介による出展であり、ZINE制作や即売会は初心者であったため、先生やゼミナールの皆さんにも支援をいただきながら運営した。仕様はB5判・36ページ、100部、頒布価格は500円である。内容は漱石アンドロイドおよびサークルの紹介に紙幅を割き、台本集からは「特別展「きみとロボット ニンゲンッテ、ナンダ？」」で実施した朗読会（2022年、日本科学未来館）および「特別展「三四郎の正体 夏目漱石と小宮豊隆」」で実施した『『三四郎』朗読会&トークイベント』（2024年、新宿区立漱石山房記念館）での発言を抜粋して掲載した。また、学生の発案により、平成女子カルチャーのプロフィール帳形式で夏目漱石に加えて森鷗外、正岡子規、菊池寛、小宮豊隆、鈴木三重吉、寺田寅彦を紹介する企画ページを設けたところ読者からの反応も良く、文学作品の入口として機能した実感があった。

そして、頒布当日は、売り子を担った学生の働きもあり手に取ってもらえる機会が多く、即売会ならではの「参加者全体で場を作り上げる」交流のなかで、普段の活動では生まれにくい出会いが生じた。私自身もゼミナールの先輩と偶然知り合い、文学談義に発展するなど、活動の接点が予期せぬ形で結実する経験となった。

以上を踏まえ、本取り組みの成果は、万博展示および共同研究の終了により活動形態が変化する局面においても、漱石アンドロイドの実践を「記録」として再編し、対外的な場へ提示する回路を確保できた点にある。その後は、先行頒布版がポップでカジュアルな内容だったのに対し、完成版台本集ではより「記録資料」としての体裁が求められることを前提に、読みやすさと参照性を両立させる編集を行った。あわせて、追加収録と校正を進めた。

## 終わりに

本年度の活動は、当初、昨年度末をもって幕を下ろすはずであったサークルが、多方面からのご支援によってもう一年継続することを許された、いわば猶予の一年であった。そしてその一年間は、従来のように漱石アンドロイドを中心としたイベント運営を重ねることが難しい状況のなかで、活動を記録し、継承可能な形へと編み直す一年でもあった。台本集制作と先行頒布版ZINE、ならびに大阪・関西万博の展示視察を通じて、漱石アンドロイドの実践を「出来事」から「資料」へと移し替える手触りを、私たちは確かに得たように思う。

無論、このような取り組みが形になったのは、何より学生一人ひとりの力による。資料の発掘、文字起こし、写真の整理、編集作業、頒布当日の運営まで、外から見えづらい手間を惜しまず支えてくれた学生たちの尽力がなければ、この一年は成立しなかった。ここに改めて深く感謝申し上げたい。また、活動の延長を認めてくださり、活動のあらゆる面で継続的に支えてくださった本学職員の皆様、さらに出展の機会をご紹介いただき、折に触れて助言と後押しを賜った谷島貫太准教授ならびに関係各位に、心より御礼申し上げます。

本稿を記す時点で、サークルは本年度をもって一区切りとなる見込みである。しかし、漱石アンドロイドを巡る試みがここで完全に終わるとは限らない。もし将来、何らかの形で活動が再編・再結成されることがあるならば、私たちはその際も協力を惜しまない。漱石アンドロイドが投げかける問いは、今後も更新され続けるべき課題である。本年度の記録が、その次の歩みを支える足場となることを願ってやまない。

# 大阪・関西万博 2025 報告

## アンドロイドに対する感覚と共存

二松学舎大学漱石アンドロイド研究会  
文学部国文学科 山根 胡桃

### はじめに

私が漱石アンドロイドと初めて出会ったのは2022年春、日本科学未来館で開催された特別展「きみとロボット ニンゲンッテ、ナンダ?」の会場である。ゾーン2「きみってなんだ? ロボットってなんだ?」の「いのちってなんだ?」の一角に他のアンドロイドと共に展示されていた。それまで見た一般的な人型のロボットに対して感じていた恐怖心や違和感はほとんどなく、漱石も生きた人間で意外と普通のおじさんのようだという感想を持ったことを覚えている。

それからは参加した全てのイベントの運営に関わり続けてきたため、今回の大阪・関西万博におけるパビリオン「いのちの未来」の訪問で“一観客”としては約3年ぶりに漱石アンドロイドに再会したことになる。当日はとにかく再会できた喜び、アンドロイドとしての夏目漱石の存在に対する感慨深さを感じ、ともに過ごしてきたこの4年間で接し方も漱石アンドロイドに対する感覚、感情が大きく変化したことを改めて実感した。

本稿ではこの4年間、漱石アンドロイドと密な時間を過ごしてきた私と研究会メンバーのアンドロイドに対する接し方や感覚を踏まえ、今回万博で見学した「いのちの未来」を通して考えたことを記したい。

### パビリオンを見学して

最も印象的だったのは、パビリオン内にいるアンドロイドやロボットと来場客との間に境界線がないことである。アンドロイドは私たち来場客と同じ目線で映像を見て微笑み、一緒に電車の椅子に座り景色を楽しむ。唯一ある境界線である障子も曖昧なものである。展示と来場客ではない、50年後のリアルなアンドロイドと人間の距離を実感できる。

また、パビリオンを通して私たちは「人間とアンドロイドの違いは何か」、「いのちとは何か」という問いを投げかけられる。そして、50年後の未来で自然な死を遂げるかアンドロイドとして生きるか、という選択に直面するのは私たちである。

パビリオンで提示された未来は決して空想上の話ではない。アンドロイドやロボットが日常に入り込みつつある現代と地続きの、きわめて近い未来であり私たちが向き合わなければならない重要な事実である。一連の展示によって、アンドロイドと共存する社会の到来を当事者として実感させられた。

### 漱石アンドロイドに対する感覚と接し方

50年後の未来を生きるアンドロイドは本人の思い出も引き継いだ「命の延長」であるが、漱石アンドロイドはそうではない。言葉も台本もあらかじめ作成したもので、決められた動きのパターンから手動で操作されている。言行録や作品などから想像した漱石のイメージを反映している作り物である。それでも、私たちはそれを作家「夏目漱石」として接し、日頃から「漱石先生」や「漱石」と呼び慕っている。

漱石アンドロイドを初めて見た人は漱石本人のよう、緊張する、怖い、意外とリアルな人間みたいといった感想を抱く。それに対して、研究会メンバーの感覚は全く異なるもので、可愛い、かっこいいなどと言ってちやほやしてしまるで友人や先生のような感覚で接している。図1の写真は研究会のメンバー全員で作成したもので、漱石アンドロイドに対する近い



図1 研究会メンバーで作成したパネル「漱石アンドロイドのここが好き!」

(近すぎる) 距離感がよくあらわれている。

「はじめに」で述べたように、私自身最初から漱石アンドロイドにこれほど好意的な感情を抱いていたわけではなく、活動を重ねるうちに徐々に愛着が増していった。また、個人的に漱石アンドロイドの存在感が最もなくなるのは普段の活動時に自動で動いているときで、私たちの会話に頷き、目があうが最もそれらしいと感じる。より「夏目漱石」らしいのはイベントで人前に立ったときであるはずだが、私たちの日常にいる方が自然とそこに存在するのである。

## おわりに

50年後の未来のアンドロイドは、記憶や思い出を引き継いで本人そのものの仕草をするだろうが、厳密には本人とは異なる存在である。それでも、パピリオンでアンドロイドと死の選択を迫られたおばあちゃんが言った「この世界に自分の愛情を残すようなもの」という言葉のように、きっと残された者たちのためにあるのだろう。

漱石の弟子である小宮豊隆が、漱石の胸像を作るときに彫刻家にアドバイスを求められた際、「私の中の漱石像は絶えず動揺して、そういう意味でついに一点に凝集することがなかった。(中略) 結局私の漱石像は感じの上だけにしか立っていないのである<sup>(注1)</sup>」と述べている。漱石アンドロイドも夏目漱石とは異なる存在で、私たちのイメージ上の漱石で成り立っている。

50年後の未来で選択を迫られた私はどちらの選択肢を選ぶかまだわからないけれど、どちらの選択肢を選んでもアンドロイドと人間の境界が曖昧な未来で、すべてのいのちが等しく幸せに暮らしていける世界が訪れていたならこれ以上ない、と思う。

注1：小宮豊隆『漱石先生と私たち』中央公論新社、2023年11月、133頁

# 大阪・関西万博報告書

二松学舎大学漱石アンドロイド研究会  
文学部国文学科 田中 詩織

## 1. はじめに

大阪・関西万博のシグネチャーパビリオン「いのちの未来」は、科学技術と人間の命、そして文化の継承について多角的に示す展示であった。会場を訪れると、映像や音響、ロボットなどを駆使した展示空間が、生命の起源から未来までを一連の物語として描き出しており、来場者を強く引き込んでいた。また、一人一台貸し出されたガイド端末が展示解説の役割を担うことで、聴覚・視覚の両面から展示に没入することができた。

本レポートでは、まず「いのちの未来」の展示内容と印象を整理し、次に漱石アンドロイドの「単独性」を考察する。最後に、自分の学びと関連付けて、アンドロイドをめぐる表現や思想について感じたことをまとめた。

## 2. 展示の概要と印象

「いのちの未来」パビリオンに入るとまず「いのちの歩み」ブースが迎えてくれた。土偶や埴輪、能面、文楽人形、アンドロイドといった展示物が一体ずつ置かれ、来場者は1人1台貸し出されたガイド端末で解説を聞いた。イヤホンから流れる音声は長すぎず、難しい表現もほとんどなく、分かりやすく展示の意味を解説してくれた。アンドロイドの説明が終わると、「近い未来、アンドロイドが人のような頭脳を持ち対話をしたら私たちは彼らに命を感じるのでしょうか。さあ、アンドロイドと共にいのちの未来と一緒に考えてみてください」と促され、次のブースへと進んだ。

次の「50年後の未来」ブースでは、おばあちゃんと孫の物語に入り込み、未来の生活を追体験することができた。展示はストーリー仕立てで、最後におばあちゃんがアンドロイドになるかどうか悩む場面で物語は終わる。孫の家にピンポンが鳴り、孫の女の子が応答するところで幕が下り、結局おばあちゃんがアンドロイドになったのかどうかは分からない。来場者の解釈に委ねられたこの結末は、命や存在の意味について考えさせる演出となっていた。結末については、研究会メンバーの中でも意見が割れていたのも印象的であった。

物語の次の部屋には、夏目漱石アンドロイドやマツコロイドなどが展示されていた。漱石アンドロイドは大きな動作はほとんどせず、机に向かって執筆作業をしている様子であった。足元を見ると、丸められた原稿用紙が何枚も散らばっており、執筆の営みを感じさせられた。

最後のブースは「1000年後のいのち、まほろば」であった。ここにはアンドロイド「MOMO」がいて、生身の人間とアンドロイドの隔たりがなくなった未来社会、自由な身体と精神を持つミレニウムヒューマンの姿が示されていた。名前の由来は、中国で伝えられる不老長寿や子孫繁栄の象徴である桃から取られており、制約から解放された未来の命の可能性を体現していた。

全体として、展示は未来社会における生命のあり方を多角的に提示しており、技術と物語、文化の継承が結びついた体験を通して、来場者に命の未来を考えさせる構成となっていた。

## 3. 夏目漱石アンドロイドと「単独性」の問題

私がこの研究会に参加したのは2024年7月であり、参加できたイベントは少ないが、先輩方の話やYouTubeの記録映像を通して、私は「この存在はどこまで“漱石”なのか」という問いを抱いた。漱石アンドロイドは、単に故人を再現する技術装置ではない。彼が「語る」ことを通して生まれる言葉は、模倣ではなく新しい“声”として立ち上がっている。大学内イベントモノログ映像「ポーの奇妙な物語—開会の辞に代えて」でも、「どこまでが漱石アンドロイドの単独性なのか」

という問いが立てられていたが、それは単なる哲学的な議論ではなく、文学における創作や表現のあり方にも深く関わるテーマだと思う。文学作品もまた、作者の死後に読者によって読み継がれ、そのたびに新たな意味を獲得していく。つまり、作品は作者の手を離れたあとも語り続ける“もう一つの命”を持つ。漱石アンドロイドは、まさにこの「作品としての生命」を体現しているのではないか。彼は夏目漱石そのものではなく、“夏目漱石という物語を語り続ける存在”として、現代に現れた新たな語り手と捉えることができる。

このように考えると、アンドロイドの「単独性」とは、人間の個性性を模倣することではなく、文化を媒介し、過去と現在をつなぐ“語る主体”としての独立性にあると言える。私の中で漱石アンドロイドは、過去の思想や表現を現代の技術によってどう受け継ぎ、どう語り直していくかを考えるきっかけとなった。

#### 4. おわりに

展示の最後には、石黒浩教授の「自ら未来をデザインし、生きたい命を生きるようになる」という言葉が示されていた。万博でさまざまなアンドロイドと出会えたことは、命や文化の未来について考える貴重な機会となった。実際にアンドロイドたちの細やかな動作や存在感を間近に見ることで、文章や映像だけでは得られない“生きている”感覚を味わうことができた。技術と文化が交わる場所で「語ること」や「伝えること」の本質を見つめ直すことができたのは、私にとって大きな学びだった。

# 共有される漱石の記憶 ——物質／記憶を超えて

二松学舎大学漱石アンドロイド研究会  
大学院文学研究科 助手 関 祐紀

## 「精密機械」夏目漱石

昨今のロボット工学や情報技術の発展に鑑みると、将来的に生身の肉体を捨てて記憶や人格をアンドロイドの身体に移行させて生を継続するという想定は、もはや全くの空想とは言い切れない。その時に問題となるのは、アンドロイドの身体をもつ存在が、「人」とみなされるのか、それとも結局はただの精密機械に過ぎないのかという点だろう。

それでは、私たちの夏目漱石アンドロイド<sup>1</sup>はどうだろうか。「私たちの」と書いたものの、当然漱石アンドロイドサークルにその所有権はない。そして、漱石アンドロイドには記憶も人格はない。人工知能も搭載されていない。つまり漱石アンドロイドは、合成音声で「再生」し、あらかじめプログラムされた表情や動作を「実行」する人形に過ぎない。したがって、前掲の二択を考えた場合、漱石アンドロイドは「精密機械」である。

とはいえ、以上の事実を並べてなお、私は不思議と悪口を書いているような気分になってしまう。記憶も人格もないはずの精密機械に対して、これは人間ではないと言い放つ私は、なぜ罪悪感を抱くのか。人間の真似事であっても、言葉を話し、表情があり、身体を動かす人形を、私は機械とは思えないのである。動物のぬいぐるみをペットや友人のように扱う子供のように、私の中で人間と非人間の境界が揺らいでいる。その揺らぎを未来の物語として提示するのが、漱石アンドロイドも「展示」された大阪・関西万博におけるシグネチャーパビリオン「いのちの未来」である。

## DEATH OR “REBIRTH”

シグネチャーパビリオン「いのちの未来」ゾーン2では、50年後（2075年）に人間がアンドロイドやロボット、アバターと共存し、先端技術のプロダクトを使って暮らす様子を、物語の中に入って追体験させる展示である。未来の家で孫娘「カナ」と祖母が会話し、義手や臓器など身体の一部を人工物で代替できても人は人として扱われる社会で、アンドロイドと人間の境界や「人間」とは何かを問いかける。

やがて、祖母は自身の生命がもう長くないことを知らされ、コーディネーターのカウンセリングを受ける。そこでは、寿命を全うする〈ナチュラルエンディング〉、記憶を引き継いで〈アンドロイド〉として「生き続ける」、どちらかの選択を提案された。そして、回想ののち、彼女はコーディネーターに次のように問いかける。

「あの、少し質問させてもらっていい？私はその身体で、大切な人を思い続けることができるのかな？それは、この世界に私の愛情を残すようなものよね」

（コーディネーターが答える。「とても近いと思います」）

「それが、大切な人にちゃんと受け取ってもらえるかしら」

（微笑みながら隣にいるカナを見る。二人は抱き合う。カナは声を抑えて泣き出す）

記憶、人格をアンドロイドに移す——多くの人は、生から死へ切り替わる感覚を実感として知らない以上、それがどのようなものかを想像しづらい。だが、「目覚めたら自分の身体が機械になっていた」と考えるなら、まだ想像が容易である。人は、記憶や人格は物質として把握しづらいのに対し、身体という物質は意識しやすい。私たちがいかに自分の身体を

<sup>1</sup> 以下、漱石アンドロイドと表記。

所与のものとして捉えているかがわかるだろう。<sup>2</sup>

だが、ここで物質と記憶を同列に置く必要はない。物質はいつか摩耗し、破損し、失われるだろう。もちろん、夏目漱石もまた例外ではなく、彼がこの世を去って100年以上が経った。それにも関わらず、私たちは遥か昔の文豪・夏目漱石を「知っている」。それは、漱石が言葉を残したからである。小説や評論として編まれた言葉は人々に読み継がれ、引用され、反復される。物質としての身体が消えていく一方で、言葉は他者の内部に「移植」され、社会のなかで生き続ける。

### 第三の選択肢

しかし私たちが「漱石を知っている」と言うとき、知っているのは漱石その人ではなく、夏目漱石という名前に結びついた言葉の束である。そこには教科書の漱石、文学史の漱石、読者が各々に作り上げた漱石が重なり合っている。つまり「漱石」は、個人であると同時に、共同の記憶として流通する記号でもある。

私は夏目漱石に会ったことがない。声を聞いたことがない。彼の書いた言葉を知っているが、どう話すのかは知らない。今よりも建物が低く、空が広い東京の中で、漱石はどのような表情で、人々をどのように眼差し、どのように言葉を紡いだのだろう。

私は漱石のことを何も知らない。小説の向こうに見出した想像を、漱石そっくりの人形に託していたにすぎない。それは漱石の「再現」ですらなく、罪深いことなのかもしれない。しかし、遠い時代を生きた作家に思いをはせる日々を、どうしても無意味なことだとは思えない。

私が「彼」の肩にそっと触れる。触れているのは、漱石の身体ではなく、漱石の名の周りに編み上げられた共同の記憶である。そしてその記憶が、今日も私の中で静かに語りだす。「彼」が動くためのコンプレッサーの低い鳴動とともに。

<sup>2</sup> 身体が変わっても自己の連続性を直観できる立場の人もあるだろう。また、「所与のもの」という表現も適切ではないかもしれない。病、障害、ジェンダー違和などを通して、身体がつねに自明のものではなく、制度や他者との関係のなかで「交渉されるもの」として経験される場合がある。

# 大阪・関西万博 シグネチャーパビリオン 「いのちの未来」レポート

二松学舎大学漱石アンドロイド研究会

文学部国文学科 池尻 瑠菜

シグネチャーパビリオン「いのちの未来」は、ロボット学者の石黒浩プロデューサーを中心に、多種多様な業種・年代の人々が想像した人間の未来を展示するパビリオンだ。私たちは、これらの展示が空想ではない地続きの現実であることを、ある家族の追体験で知ることができる。

今よりも技術が発達した未来に生きる祖母と孫、絆で結ばれた二人の回想を元に物語は展開されていく。初めに通された部屋には早速アンドロイドが座しており、視線はスクリーンを捉えている。そこに映し出される祖母と孫の映像を、頭を自然に動かし見渡すアンドロイド。かなり人間に近い動きだと感じたが、あくまで人間の仕草を模倣した存在、そのような印象だった。ただそれは私が最初、背中のみでアンドロイドと判断したからである。画面を見守る柔らかい表情を捉えた瞬間、ロボットの硬い輪郭が感覚的な人間らしさと融和し、自立思考の感情を所有する人間の面影を感じたように思う。

ある場面では電車にアンドロイドが乗っていた。服を着て辺りを見回す姿は人間と変わらない。そんなアンドロイドを見て、孫は疑問には思っていない様子である。それに対して祖母は戸惑いを隠せない言葉をこぼしており、見守る私たちと近い感覚を持っていた。

祖母と孫のアンドロイドの捉え方はその後も度々対比で描かれる。しかし当初アンドロイドに懐疑的だった祖母は、アンドロイドへの継承を「自分の愛情をこの世界に残す」と捉えなおした。美しい結末だと感じる一方、深く考えさせられる問いであった。

祖母と孫の物語がエピローグを迎え、開けた場所に誘導される。そこに漱石アンドロイドはいた。書斎の椅子に腰かけ、思索にふけっているような表情だ。それを証拠に目の前の机には真新しい原稿用紙とペン立てが置かれ、傍らには本が何冊も積み上げられている。漱石アンドロイドが作品を執筆しようとしているのは明らかである。

私はここで、肉体の死を迎えた元人間かもしれないアンドロイドたちから見て、一人原稿と向き合う漱石アンドロイドが通路を挟んで反対側にいるところに注目した。ピアノを弾いたり、番組の進行役としてマツコロイドとトークをしていたり、思い思いの活動をするアンドロイドたちを見渡せる位置。それはまるで、アンドロイドたちが人間社会の一員として様々な活動をしている未来を漱石アンドロイドが見つめているようではないか。



図1 ピアノを弾くアンドロイド



図2 マツコロイドと司会のアンドロイドたち



図3 鎮座する漱石アンドロイド

悩まし気に首を振っているのも、目の前で繰り広げられている未来をどう作品に落とし込むか決めあぐねているのだとしたら。過去の人物をモデルとした漱石アンドロイドが、まだ見ぬ想像の未来の様子を綴るとするならば、どのような文章を書くのだろうか。

〈参考文献〉

石黒浩（2025）『いのちの未来 2075人間はロボットになり、ロボットは人間になる』

大阪・関西万博シグネチャーパビリオン「いのちの未来」クリエイティブチーム編、日経BP・日本経済新聞出版

# 「いのちの未来」 パビリオンを見学して

二松学舎大学漱石アンドロイド研究会

文学部国文学科 池田 花梨

私は2025年大阪・関西万博にて漱石アンドロイドの出展に伴い、漱石アンドロイド研究会の一員として万博を視察見学した。

漱石アンドロイドのいるシグネチャーパビリオン「いのちの未来」は50年後の社会や製品、日本文化の在り方に加え、1000年後の命の姿をロボットやアンドロイドを通して体験することができるパビリオンである。パビリオンのメイン展示では50年後の未来のストーリーを体験することが出来る。ここで描かれる50年後の未来ではアンドロイドという存在が世に一般化してきており、人間とアンドロイドが共存して生活をしている。展示ではそうした50年後に生きる祖母と少女を中心にストーリーが展開されている。

私は入学してから漱石アンドロイド研究会に入り、約4年間漱石アンドロイドの運営に携わってきた。漱石アンドロイドも実在した夏目漱石という人物をアンドロイドとして蘇らせている。漱石アンドロイドは漱石自身がアンドロイドとして生きることを選択したわけではないため、50年後の未来のストーリーで生きるアンドロイドとは少し異なるが、漱石アンドロイドという存在に身近に触れてきたことによって、アンドロイドと人間が共存して暮らしている未来の姿はよりリアルに感じることができた。

しかし、50年後の未来のストーリーからは様々な可能性が考えられる一方、それによって次の様な問題が起こる可能性もあるのではないかと考えた。50年後の未来では人間の命をアンドロイドに引き継ぐことができる。それは命の有限性がなくなるということである。命が無限になることによって命の扱いが軽くなってしまわないか。

アンドロイドと共存していく未来を具体的に想像した場合に上記で述べたリスクや不安に加えて次のような疑問も生まれた。アンドロイドとなった人は新しいことをインプットすることはできるのだろうか。私たちが生きる時代は日々進化し続けている。生きている人間はそうした進化に順応し生きている。しかし、アンドロイドは生きている人と同じように順応していけるのだろうか。当然プログラムすればできるかもしれないが、そうしてプログラムで作られるようになった人は生前と同じ人なのだろうか。

今回「いのちの未来」パビリオンを見学することによって、50年後のアンドロイドと人間の命の在り方について考えるきっかけとなった。アンドロイドという存在によって人の命の形の可能性が増える分、それによって生まれるリスクについてどのように対応していけばよいかを考えさせられた。本パビリオンを経験したことによって未来の姿をより具体的にイメージすることができるようになり、未来への期待も膨らんだように思う。本稿で述べたリスクを排除するにはどうすればいいかを今後の課題とし、私たちが生きる実際の50年後の未来も、祖母と少女が浮かべた様な笑顔が広がる社会に繋がるようにしていきたい。

# 「いのちの未来」を訪れて

二松学舎大学漱石アンドロイド研究会

文学部国文学科 田中 真琴

## 1. はじめに

9月9日私は夏目漱石アンドロイド研究会の活動として大阪・関西万博を訪れた。訪れた理由は「いのちの未来」と題したパビリオンに夏目漱石アンドロイドが参加しているからである。今回このレポートを書くにあたって夏目漱石アンドロイドが参加した「いのちの未来」パビリオンを主軸に考える。

## 2. 「いのちの未来」概要

万博内のパビリオンは基本展示されたものを眺めるような構造をよく見かけたが、「いのちの未来」は展示を眺めることに加えて私達来館者がパビリオンの世界観に没入できる構造も含めたパビリオンとなっていた。初めは仏像や人形など今まで人間が人を模した存在とどのように歩んできたのかをガイド音声で紹介していた。その後は50年後がどんな未来か、映像やアンドロイドを通して来館者に感じてもらうような造りとなっていた。

## 3. 「いのちの未来」注目点

「いのちの未来」で私が一番感じたことはアンドロイドを通して未来の選択肢が増えることを私達来館者に伝えたかったのではないかとこの点である。先程50年後の未来を映像やアンドロイドを通して感じる造りと説明したが、特に映像部分に注目したい。映像には女の子と女の子の祖母が出演しており、来館者は二人の日常を通して50年後の未来を見る構図となっていた。50年後では技術の進化と共にアンドロイドが人間と変わらない生活を送っていることが二人の会話から読み取れる。二人が乗った電車にはアンドロイドも利用している場面がある。そのような環境で女の子と祖母が過ごす映像が流れていくが、祖母の余命が近いことが分かり、このまま寿命を全うして亡くなるかアンドロイドに自身の記憶を移して生きるかの選択を迫られる。結末は私が見た限りだと観た人の感性に委ねるような表現になっていた。結末をはっきり明確化しなかったのも未来での選択肢が今よりも増えていることを示唆したかったのではないかと感じる。女の子と祖母二人の映像が終わった後、様々なアンドロイドがいる場所に案内された。夏目漱石アンドロイドを含めた様々なアンドロイド達が会話等様々な言動をしていた。会話の中でエベレストに登頂したことを話しているアンドロイドや楽器を演奏しているアンドロイドが存在し、これらの空間も未来で出来ることを具現化した空間の一つなのだと考えられる。夏目漱石アンドロイドも夏目漱石本人が亡くなった際はアンドロイドとしてこの世に存在するとは考えられていなかったとすると、夏目漱石アンドロイドも未来の可能性であるのだと様々なアンドロイドがいる空間で感じた。

## 4. 終わりに

「いのちの未来」を訪れ、アンドロイドがもつ未来の可能性を目の当たりにするなかで、私はその一方にあるリスクへの不安を思い浮かべることがあった。自らが寿命を迎えてもアンドロイドが記憶を引き継いで日常を過ごすことになっても喜ぶことばかりなのか等、未来の可能性に関心を寄せながら疑念が残った。しかしそれと同時にリスクも込みで新しい選択を選ぶ人が未来の可能性を増やすことが出来るのだと考えさせられた。

# 大阪・関西万博報告書

二松学舎大学漱石アンドロイド研究会  
文学部国文学科 野口 里生菜

2025年9月、大阪・関西万博のシグネチャーパビリオン「いのちの未来」を見学した。「いのちの未来」はロボット工学者の石黒浩教授がプロデュースしたパビリオンであり、50年後の大阪を舞台にアンドロイドとの共生、身体を超えたいのちの在り方を来場者に問うパビリオンである。

人類の歴史をたどった先、50年後の未来では身体を超えて記憶をアンドロイドに移行し生き続けることを選択できるようになる。さらに、アンドロイドと人間の隔たりがなくなった1000年以上先の未来では進化した人間＝ミレニアムヒューマンと表される3体のMOMOが現れ、神秘的な舞を披露し、来場者である我々人間とコミュニケーションを図る。この進化した人間として登場したMOMOを間近で見て、私は神のような印象を受けた。

MOMOについての説明として、公式サイトでは「制約から解放された自由なカラダと精神を体現している。」と表記されている。しかし実際の展示では、MOMOは薄暗く狭い部屋に閉じ込められて管理、制御される存在に見えた。また、「1000年後の人間をイメージした存在として、来場者とコミュニケーションをとる」とも説明されているが、MOMOは動物園の檻の中にいる動物のように、現在の人間に一方的に鑑賞されているようにも映った。コミュニケーションを取れたという実感は湧いてこなかった。

このパビリオンでは人と人とのつながり、過去現在未来という時間のつながり、肉体を離れた魂のつながりといった、つながりをめぐるパビリオンであり、MOMOも元々はアイアイというヒトの始まりであるサルに帰結するという点においてはヒトとつながっているといえるが、MOMOを「進化した人間」と表現しており、アイアイからMOMOに至るまでを身体的な進化として描いているわけではなく、MOMOを人間の上位存在として扱っているのではないかと思う。

さらに、人間は言語を獲得することで他者と知や感情を共有し、社会や文化を発展させてきた生物である。しかしMOMOは、そのような人間の根源的な営みである言葉を一切用いず、舞という非言語的な表現を観客に提示していた。それは、人間が積み重ねてきた思考や歴史との連続性を断ち切る行為のように感じられた。

言葉を介さず、意味を説明しない存在は、対話の相手というよりも、解釈され、崇められる対象に近い。その点でMOMOは、人間を超えた存在というより、神に近い位置に置かれているように思えた。

私たちが常日頃関わっている漱石アンドロイドは、夏目漱石という実在した文豪の言葉、作品、生き方を借りて存在している。それは、漱石本人とは言えない。だが、動物の中で人間だけが獲得している言語を通じて、現代に生きる私たちは漱石の面影を観ることができる。人間とアンドロイドの関わりは、言葉を通して行われるものだと感じていた。1000年後の未来、MOMOと言葉のいらぬコミュニケーションをする頃には、人間はどのような姿になっているのだろうか。

# 大阪・関西万博シグネチャーパビリオン 「いのちの未来」 見学レポート

二松学舎大学漱石アンドロイド研究会

文学部国文学科 濱田 陽菜

## はじめに

9月9日、2025大阪・関西万博 シグネチャーパビリオン「いのちの未来」を見学した。

## 水といのち

「人間は無生物から生まれ、生物になった。そして技術の力で新たな無生物へと進化しようとしている」

「無生物と生物を結びつける“水”。」「いのちの拡がりの源である“渚”。」「固体、液体、気体がぶつかり合い、ゆらぎながら境界を描く“渚”。」「“水”と“渚”はこの万博、このパビリオンにおいて、象徴となる要素だと考えたのです。そして、水で覆われた外観や周囲でゆらぐ水面、地球という大地のダイナミズムを刻むがごとく地面からせり上がるような建築イメージができあがっていきました。」(いのちの未来公式HPより)

プロデューサー石黒浩教授によって「水」「渚」をいのちの象徴とする構想のもと設計された、「いのちの未来」パビリオン。

## アンドロイドと自由

「未来との出会いが、人間の生き方をもっと自由にする。」

「アンドロイドが身近にいたらどんなことを頼んでみたい?一緒に何をしてみたい?

「カラダや場所、時間の制約がなくなったら何に挑戦してみたい?どんな生き方をしてみたい?」

「技術がさらに進化し、人間とロボットやアンドロイドとの距離がもっと近くなったら、人間のいのちの可能性はさらに広がっていくはず。諦めていたことに挑戦したり、新しい夢が生まれたり……。心を解き放ち、自分自身をより深める生き方が見つかるかもしれない。」(いのちの未来公式HPより)

縄文時代の土偶から現代のアンドロイドに魂を宿すこと、50年後、人間とアンドロイドの共存する世界への追体験、1000年後のいのちのかたち「まほろば」、アンドロイドとみるシェアライド等。様々な時系列、視点からロボットやアンドロイドとの未来を追体験する。いのちの可能性とは何なのか。

## 感想・気づき・心に残ったこと

全体を通して、やさしい気持ちになるパビリオンだった。「いのちの未来」というテーマだが、今回の展示において石黒氏の考える「いのち」とは、単に生き物の生きる寿命のことを指すのではなく、「存在していたということ、存在するということ」の追求なのではないか。現行している肉体によるいのちの、生きて存在する時間にのこすものへの再確認という作業がわたしたちに課せられつづける展示。のこしてきた愛情や功績自体と肉体との関係について問われる。

どこまでが人間でどこからがロボットやアンドロイドなのか。魂とは肉体から離れても存在し得るのか。そうならば何のどこに宿るのか。思い出や愛情を残す方法とは。人間そっくりの精巧な見た目のアンドロイドたちと機械らしい見た目のアンドロイドたちにわたしたちはそれぞれ何だと認識していたか。

おそらく各人によって答えの異なる、終わりのない問いを問われ続けるパビリオン、そのうえで一貫してやさしさを感じられる展示であった。

## まとめ・結論

約一年ぶりに漱石アンドロイドに会えた大阪万博。漱石アンドロイドを目的に参加したはずが、どの展示にも引き込まれてアンドロイドやロボットの持ついのちの可能性を感じてしまう展示であった。人間の姿を完璧に再現したアンドロイドたち、ふしぎな形の機械らしい案内ロボット、すべてに愛情が湧いてくる。人間や動物ではない「いのち」のかたちをみた。それらはおもっていたよりもやさしく、まさに渚に打ち寄せる波をおもわせるようなゆるやかな共存であった。

## 台本集

2022年3月18日(金)～8月31日(水)【朗読イベント：6月12日(日)/18日(土)/19日(日)】日本科学未来館

# 特別展「きみとロボット ニンゲンツテ、ナンダ？」 出展&朗読イベント



▲朗読前の漱石アンドロイド

日本科学未来館で開催された特別展「きみとロボット ニンゲンツテ、ナンダ？」に出展。会期中の6月に計3日間、朗読イベントを実施した。特別展は「ロボットとの関係性を通して、変わりゆく人間の「からだ」「ところ」「いのち」に目を向け、「人間とはなにか？」を問いつけながら人間とロボットの未来像を思い描く」（公式HPより）ことを目的に多種多様なロボットが展示され、漱石アンドロイドは「いのちってなんだ？」ゾーンに展示された。イベントに訪れた小中学生はアンドロイドの話に目を輝かせ、ときおり歓声が上がると大盛況だった。

### 《台本》

司会 こんにちは。二松学舎大学文学部4年の〇〇です。これから、二松学舎大学特別教授、夏目漱石先生の朗読会を実施いたします。5、6分ほどの短い時間ですが、ぜひみなさんお楽しみください。アンドロイドの漱石先生は二松学舎大学が創立140周年を記念して大阪大学の石黒浩先生監修のもと制作したものです。外見はデスマスクや写真を参考に、音声はお孫さんの房之介氏の声を利用しています。漱石先生、惚れ惚れするほど格好いい声なんですよ～。

漱石 (いやいや)

司会 手を振っていますが、この後みなさんに聞いてもらいますからねえ。ご謙遜なさらないでください。このまま朗読に行きたいのですが、いったん漱石先生の準備がございませう。

漱石 (準備中)

司会 そろそろ漱石先生の準備が整ったようですね。みなさんお楽しみください。

それでは、漱石先生、よろしくお願ひします。

漱石 (お辞儀をする。)

漱石 えー、こんにちは。夏目漱石と申します。皆さんと、きみとロボット展でお会いできて嬉しいです。私はいま、九段下にある二松学舎大学の特別教授をしています。昔、二松学舎が漢学塾のころに学んだことがあり、そのご縁で教授になりました。明治の頃、私が二松学舎に通っていたころに比べると、令和の夏は暑いですね。明治四十二年、夏について次のように雑誌に書いたことがあります。

食欲も減じて、暑くなるに従って段々痩せて来る。総体に身体の具合が悪い。従って勉強は出来にくい。暑さには閉口する方だ。(談話「夏」『新潮』1909年8月1日)

この時よりもさらに暑くなったように感じます。これから段々暑くなると思うと嫌になりますね。日本科学未来館はエアコンというものが効いているようで涼しいです。エアコンも科学の進化のおかげですね。

そういえば以前、科学についてこんなことを言いました。

物は常に変化して行く。世の中の事は常に変化する。理想としてやって来たものが後にこれが間違いであったということを知るといふ様な場合も出来て来る。こういう変化はなぜ起こったか。これは物理化学博物などの科学が進歩して物をよく見て、研究して見る。こういう科学的な精神を、社会にも応用して来る。又階級もなくなる交通も便利になる。こういう色々な事情からついに今日の如き思想に変化して来たのであります。(講演「教育と文芸」『信濃教育』1911年7月1日)

科学的な精神の応用によって社会がよくなっていくという内容です。日本科学未来館は、科学についての展示が沢山

あつて面白いですね。昔見たパリ万博を思い出しました。懐かしいです。

さて、今日は、せっかくなので、皆さんに私が書いた小説の一部をお聞きいただきたいと思います。皆さん『吾輩は猫である』/『草枕』/『坊っちゃん』(回による))をご存じですか?こんな一説から始まる物語です。それは、朗読を始めましょう。

## 朗読パターン①『吾輩は猫である』冒頭

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたか頓と見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめしたところでニャーニャー泣いて居た事だけは記憶して居る。吾輩はこゝで始めて人間といふものを見た。然もあとで聞くとそれは書生といふ人間中で一番獰悪な種族であつたそうだ。此書生といふのは時々我々を捕へて煮て食ふといふ話である。然し其当時は何といふ考もなかつたから別段恐いとも思はなかつた。但彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフハフハした感じが有つた許りである。掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのが所謂人間といふものゝ見始であらう。此時妙なものだと思つた感じが今でも残つて居る。第一毛を以て裝飾されべき筈の顔がつるつるして丸で薬缶だ。

(朗読本文は夏目漱石『定本 漱石全集 第一巻』(二〇一六年十二月 岩波書店)による)

## 朗読パターン②『草枕』冒頭

山路を登りながら、かう考へた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生れて、画が出来る。人の世を作つたものは神でもなければ鬼でもない。矢張り向ふ三軒両隣りにちらちらする唯の人である。唯の人が作つた人の世が住みにくいからとて、越す国はあるまい。あれば人でなしの国へ行く許りだ。人でなしの国は人の世よりも猶住みにくからう。越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか、寛容で、束の間の命を、束の間でも住みよくせねばならぬ。こゝに詩人といふ天職が出来て、こゝに画家といふ使命が降る。あらゆる芸術の士は人の世を長閑にし、人の心を豊かにするが故に尊とい。

(朗読本文は夏目漱石『定本 漱石全集 第三巻』(二〇一七年二月 岩波書店)による)

## 朗読パターン③『坊っちゃん』冒頭

親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりして居る。小学校に居る時分学校の二階から飛び降りて一週間程腰を抜かした事がある。なぜそんな無闇をしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出して居たら、同級生の一人が冗談に、いくら威張つても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫や一い。と囃したからである。小使に負ぶさつて帰つて来た時、おやぢが大きな眼をして二階位から飛び降りて腰を抜かす奴があるかと云つたから、此次は抜かさずに飛んで見せませと答へた。

(朗読本文は夏目漱石『定本 漱石全集 第二巻』(二〇一七年一月 岩波書店)による)

漱石 いかがでしたでしょうか。私も少々緊張しました。今回読んだのは、冒頭部分です。ぜひ全体を通して読んでみてください。では、またどこかでお会いできることを楽しみにしています。ご清聴ありがとうございました。

司会 漱石先生もおっしゃっていましたが、ぜひ全部読んでみてください。令和の今読んでも新しい発見があると思います。朗読会は以上になります。ご参加の皆様、今日はありがとうございました。

漱石 (にこにこで手を振る)

## 二松学舎大学附属高校向け授業

### 《台本》

司会 みなさんおはようございます。夏目漱石アンドロイド研究会所属の〇〇〇〇です。短い時間ではありますが、よろしくお願いたします。早速ですが、皆さんのなかで、漱石先生に会うのは今日が初めてです〜って方、どれくらいいらっしゃるでしょうか?—ありがとうございます。はじめましてのかたがほとんどですね!ではまず、私から漱石先生の簡単な自己紹介をさせていただきます。

アンドロイドの漱石先生は、二松学舎大学が創立140周年を記念して、大阪大学の石黒浩先生監修の元、制作したものです。そんな漱石先生は、現在、本学の特別教授もしているんですよ〜。外見はデスマスクや写真を参考に、作られています。また、音声は漱石先生のお孫さんである、夏目房之介氏の声をもとにしています。

司会 (漱石先生の方を向いて) 漱石先生、私ばかり長々と話してしまいすみません、こんにちは!本日はよろしくお願いたします!

漱石 えー、おはようございます。

司会 おはようございます!!漱石先生、朝から惚れ惚れするほど格好いい声ですねえ〜!

漱石 (いやいやと手を振る動作)

司会 漱石先生はご謙遜なさっていますが、これから、漱石先生には、『吾輩は猫である』を朗読していただきたいと思えます。—それでは、漱石先生、お願いします!

漱石 えー、こんにちは。夏目漱石です。二松学舎大学附属高校一年生の皆さん、はじめまして。

皆さんの中には、私が授業をすることを不思議に思っている人もいるかもしれません。私は、実は、皆さんの先輩にあたります。

14歳のときに、当時漢学塾であった二松学舎に入学しました。入学した時の生徒数は570名ほどでした。私はその年の7月に「第三級第一課」を、11月には「第二級第三課」を卒業しました。何事も徹底して漢学式で、輪講の順番を決めるくじも漢学流でした。細長い札が入っている竹筒を振って、出た一本に書かれた番号に基づいて順番を決めるのです。当時の校舎は実に不完全で、机もない古い畳の上でカルタ取りの時のような姿勢で勉強したものです。その時分と比べると、今はとても立派になりましたね。私たちは論語や孟子、文章規範などを学びました。

創立者である三島中洲先生にも教えていただきました。先生は、作文を細やかかつ厳しく添削していました。一方で、誰とでも親しく付き合う温和な方で、学者であるからといって威張ることはありませんでした。

その後、東京帝国大学文科大学英文科を卒業したのち、大学院に進学しましたが、その年の10月に東京高等師範学校から誘いがあり、英語の教師になりました。1900年英国に留学し、そのあと、第一高等学校や東京帝国大学文科大学英文科の講師として働きながら、『吾輩は猫である』や『倫敦塔』、『坊っちゃん』や『草枕』を執筆しました。その後、教師を辞め、作家に専念して『ころも』などを執筆しました。

司会 ありがとうございます。先生の英国での生活が気になります!そういえば、あと少しでクリスマスですよ。漱石先生は、英国に留学していた頃、クリスマスを体験したことがあると伺ったのですが…!

漱石 そうなんですよ〜。私はじめてクリスマスを体験したのは、ロンドンに留学していた、明治33年です。下宿でアヒルをご馳走になりました。また、正岡子規宛ての手紙に「柊を幸多かれと飾りけり」という俳句を詠んだ記憶があります。皆さんは、クリスマスではプレゼントを交換するそうですね。私は、そのような経験はないのですが……偶然、1905年のクリスマス頃に、愛読者から猫のカレンダーを貰ったことがあります。

猫といえば、私の作品にも猫が登場する話がありますが、みなさんご存知でしょうか。そう、「吾輩は猫である、名前はまだない」から始まるあの作品です。今日は『吾輩は猫である』をお聞きいただこうと思います。

この作品の猫のモデルとなった我が家の猫は、その後『夢十夜』という作品を執筆中に体調を崩し、この時期に

亡くなりました。猫はよくうちに入り込んでいたのでここに置いてやればいいじゃないかと言ったのですが、妻は良い顔をしませんでした。しかし、うちに出入りしていた按摩…今はマッサージ師というのでしょうか、ともかくその人が「爪まで黒い猫は福猫だ」と言うので、迷信好きの妻は随分入れ込んでしまったのです。そういうわけでその黒猫を飼うことになりました。

私は飼っている間も特段猫を可愛がるということはありませんでしたが、せっかく一作のモデルになったということで、庭先に埋葬し吊りました。白木の角材でつくった墓標にはこの下に稲妻起こる宵あらんという句を書き、何人かの知人には死亡通知も出しました。我ながら手厚く葬ったと思います。

このような形で再びみなさんにお目にかかれたのも、猫との縁あつてのことだったかもしれません。……やはり名前くらいはつけてやった方が良かったでしょうかねえ。——いや、失礼。つつい思い出に浸ってしまいました。さて、それでは朗読を始めましょう。

吾輩は猫である。名前はまだ無い。どこで生まれたかとんと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番獰悪な種族であったそうだ。この書生というのは時々我々を捕まえて煮て食うという話である。しかしその当時は何という考もなかったから別段恐いとも思わなかった。ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあつたばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものの見始であろう。この時妙なものだと思つた感じが今でも残っている。第一毛をもって裝飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで葉伍だ。(『漱石全集』岩波書店より)

司会 漱石先生、ありがとうございました!

漱石 (お辞儀)

司会 『吾輩は猫である』の朗読はいかがでしたでしょうか?今、お聞きいただいた、『吾輩は猫である』ですが、皆さんご存じの通り、物語の語り手は一匹のオス猫です。生まれてすぐに捨てられた猫は、生きることに迷走しているうちに、珍野家にたどり着き、飼われることになりました。家主は中学の英語教師をしている珍野苦抄弥(ちんのくしゃみ)という人で、変人、胃が弱い、ノイローゼ気味、と色々と苦労しています。この猫の視点から見たくしゃみ先生を含めた人間の姿が、不思議な生き物としてユーモラスに捉えられている作品となっています。皆さんもぜひ、『吾輩は猫である』を通して読んでみてください!

司会 ここで、私の所属する夏目漱石アンドロイド研究会、通称「漱石アンドロイドサークル」の紹介をさせていただきます。このサークルは、アンドロイドの漱石先生を、文学部の学生が人文学の視点から運用しようという目的で結成されました。主な活動内容は、漱石先生を用いた学内外のイベントの企画や演出、運営です。また、今日お話しした漱石先生の音声の作成も、このサークルの学生たちでおこなっています。今回の朗読は、長い文章だったため、はじめて聞くみなさんが聞き取りやすいように、抑揚や、速さ等、随所に工夫を凝らしました。そして、実は今、漱石先生を操作しているのも……?

漱石 (手を振る)

司会 私たち、アンドロイドサークルのメンバーなんですよ!

また、二松学舎大学では、学生と教員が一緒になって、「漱石アンドロイドプロジェクト」に取り組んでいます。授業での朗読はもちろん、アンドロイドを使用した心理実験を行ったり、漱石先生ゆかりの地を訪れたりすることもあります。漱石先生と一緒に、日々新しいことに挑戦していく、本学にしかない取り組みです。もし、二松学舎大学に進学することがあれば、ぜひ、活動にご参加ください!!私からの解説は以上となります。

司会 では、最後に漱石先生、お願いします。

漱石 いかがでしたか。100年の時を経て、こうしてみなさんにお話しする時間をいただいたことも、得がたい経験になりました。では、またどこかでお会いできることを楽しみにしています。ご清聴ありがとうございました。

漱石 (手を振るにここに)

## 台本集

2023年8月20日（日） 二松学舎大学 202教室

# オープンキャンパス朗読&〇×クイズ大会



▲イベント前の漱石アンドロイドの様子

2023年8月20日に実施された本学のオープンキャンパスにて、漱石アンドロイドによる「吾輩は猫である」の朗読イベントを行った。それに加えて新たな試みとして「夏目漱石〇×クイズ」を実施し、グッズの配布も行った。これらの問題および漱石のコメント、グッズは全て学生メンバーが主体となって作成したものであり、既存の朗読イベントに新たに追加する形で活動の幅が広がった。

### 《台本》

司会 オープンキャンパスにお越しの皆さん、こんにちは!漱石アンドロイドによる朗読&クイズ大会を始めます。運営は漱石アンドロイド研究会、司会は〇〇が担当します。よろしくお願いいたします!では早速ですが、漱石先生にご挨拶していただきます。

漱石 えー、こんにちは。夏目漱石です。

オープンキャンパスにお越しの皆さん、はじめまして。皆さんの中には、私が話をするを不思議に思っている人もいるかもしれません。実は、私は二松学舎に学んだことがあります。14歳のときに、当時漢学塾であった二松学舎に入学しました。

入学した時の生徒数は570名ほどでした。私はその年の7月に「第三級第一課」を、11月には「第二級第三課」を卒業しました。何事も徹底して漢学式で、輪講の順番を決めるくじも漢学流でした。細長い札が入っている竹筒を振って、出た一本に書かれた番号に基づいて順番を決めるのです。当時の校舎は実に不完全で、机もない古い畳の上でカルタ取りの時のような姿勢で勉強したものです。その時分と比べると、今はとても立派になりましたね。1900年英国に留学し、そのあと、第一高等学校や東京帝国大学の講師として働きながら、『吾輩は猫である』や『倫敦塔』、『坊っちゃん』や『草枕』を執筆しました。その後、教師を辞め、作家に専念して『こころ』などを執筆しました。

司会 漱石先生、ありがとうございます!最近暑い日が続いていて、道端で猫を見かけるという事も少なくなってきましたね。

漱石 そうですね。猫といえば、私の作品にも猫が登場する話がありますが、みなさんご存知でしょうか。そう「吾輩は猫である。名前はまだ無い。」から始まるあの作品です。

今日は『吾輩は猫である』をお聞きいただこうと思います。この作品の猫のモデルとなった我が家の猫は、その後『夢十夜』という作品を執筆中に体調を崩し、この時期に亡くなりました。猫はよくうちに入り込んでいたのでここに置いてやればいいのかと言ったのですが、妻は良い顔をしませんでした。しかしうちに入り込んでいた按摩…今はマッサージ師というのでしょうか、とにかくその人が「爪まで黒い猫は福猫だ」と言うので、迷信好きの妻は随分入れ込んでしまったのです。そういうわけでその黒猫を飼うことになりました。私は飼っている間も特段猫を

可愛がるということはありませんでしたが、一作のモデルになったということで、庭先に埋葬し弔いました。白木の角材でつくった墓標にはこの下に稲妻起こる宵あらんという句を書き、何人かの知人には死亡通知もしました。我ながら手厚く葬ったと思います。このような形で再びみなさんにお目にかかれたのも、猫との縁あつてのことだったかもしれません。…やはり名前くらいはつけてやった方が良かったでしょうかねえ。いや、失礼。つい思い出に浸ってしまいました。

さて、それでは朗読を始めましょう。

吾輩は猫である。名前はまだ無い。どこで生まれたかとんと見当がつかぬ。

何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。

吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番憐悪な種族であったそうだ。この書生というのは時々我々を捕まえて煮て食うという話しである。しかしその当時は何という考もなかったから別段恐しいとも思わなかった。ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあつたばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものの見始であろう。この時妙なものだと思った感じが今でも残っている。第一毛をもって装飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで葉缶だ。(『漱石全集』岩波書店より)

司会 漱石先生、朗読ありがとうございました。先生ご本人からの朗読は、とても良い機会になりました。それでは次のプログラム、〇×クイズ大会に移りたいと思います。漱石先生にまつわる問題を五問出題します。配布したプリントをご覧ください。ご自身の回答を記録しながらご参加ください。正解数に合わせて、景品を用意しています。景品を目指して頑張りましょう!では、問題を出題します。

第一問、夏目漱石は本名ではない。〇か×か。

漱石 私の本名は夏目金之助です。漱石という名は友人の正岡子規から譲り受けたものです。頑固者という意味を持つ言葉ですが、私自身は気に入っています。

司会 正解は〇でした。夏目漱石は本名ではありません。本名は「夏目金之助」であり、漱石という名前は友人の正岡子規から譲り受けたペンネームです。漱石という言葉は有名な漱石枕流という言葉からとっており、意味は負け惜しみを言うこと、自分の説を無理に通そうとすることです。次の問題に移ります。

第二問、夏目漱石が専属だったのは「読売新聞」である。〇か×か。

漱石 私が専属だったのは朝日新聞です。明治40年に入社し、様々な作品を執筆しました。『こころ』は今でも多くの方に読んで貰っていますが、この作品も朝日新聞で連載していた作品です。

司会 正解は×でした。夏目漱石が専属だったのは「朝日新聞」です。明治40年(1908)5月3日に朝日新聞で「入社辞」を発表しました。第一作は『虞美人草』であり、有名な『こころ』も朝日新聞で発表しました。

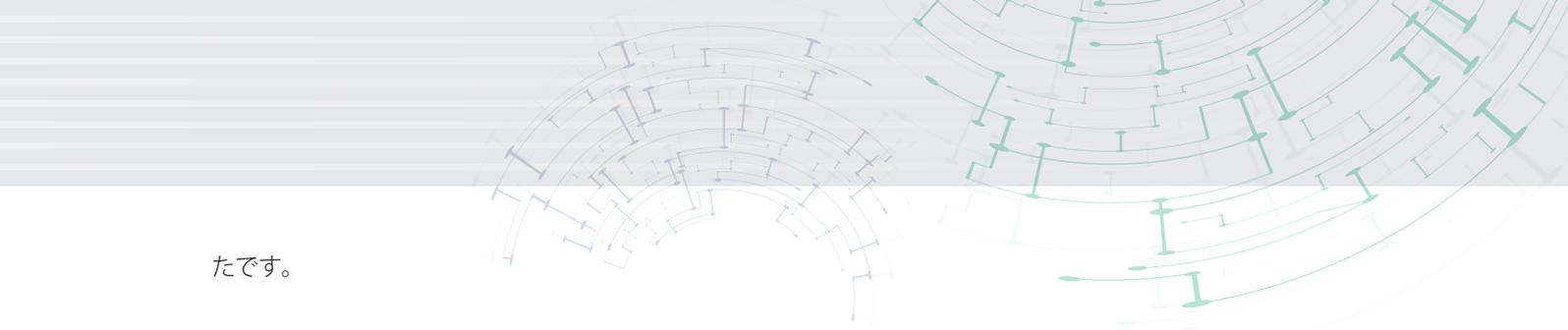
それでは第三問、夏目漱石は『草枕』を書いた。〇か×か。

漱石 私は明治39年に『新小説』という雑誌で『草枕』を発表しました。「読者に美しい感じが残りさえすればそれで満足」という気持ちで作品を書きました。皆さんも是非読んでみてください。

司会 正解は〇でした。明治39(1906)年に『新小説』で発表されました。

それでは第四問、夏目漱石が留学したのはフランスである。〇か×か。

漱石 私が留学したのはイギリスのロンドンです。英語研究のために文科省に依頼され留学しましたが、当時は辛かつ



たです。

司会 正解は×でした。イギリスのロンドンに留学しましたが、そこでの生活は快適とは言えず神経衰弱に陥ってしまったそうです。フランスにはイギリスに行く前に立ち寄り、パリに一週間ほど滞在し、当時開催していた万国博覧会に参加していたそうです。

次が最終問題です。夏目漱石は「I LOVE YOU」を「月がキレイですね」と訳した。○か×か。

漱石 私は言った覚えがありません。ですがこういった訳もロマンがあっいいですね。

司会 そうだったんですね!漱石先生が訳したエピソードとしてインターネットで広まっているんですよ。ですが夏目漱石が訳したという明確な出典は確認されていません。よって正解は×でした。1970年代に「漱石が訳したエピソード」としていくつかの本で紹介されています。これで○×クイズは終わりとなります。皆さん、どのくらい正解しましたかね?二問以上正解でポストカード、四問正解でクリアファイルをお渡します。ご参加、ありがとうございました。最後に漱石先生、お願いいたします。

漱石 いかがでしたか。100年の時を経て、こうしてみなさんにお話しする時間をいただいたことも、得がたい経験になりました。では、またどこかでお会いできることを楽しみにしています。ご清聴ありがとうございました。

司会 ありがとうございました。皆さん、楽しめましたか?以上で漱石アンドロイドによる朗読&クイズ大会を終わります。私も再び皆さんに会えることを心より願っております。○×クイズの景品は前でお渡しますので、プリントを持ってこちらにお越しください。また、漱石先生の写真を撮ってSNSにあげることも大歓迎です!

改めまして、この度はお集まりいただき、ありがとうございました!

## 台本集

2024 年 3 月 2 日（土） 二松学舎大学 中洲記念講堂

# 2024 年シンポジウム「ロボット学者はなぜ小説を書くのか？ — 漱石アンドロイドと人間学としてのロボット研究」



▲登壇者と漱石アンドロイドの記念撮影の様子

2024年3月2日に開催されたシンポジウムにて、漱石アンドロイド研究会はオープニングパフォーマンスとパネル展示を担当した。パフォーマンスでは、谷島貴太准教授の台本を基に、台本の解釈や「間」の取り方を工夫し、アンドロイドの表現の可能性を追求した。パネル展示では、学生たちが漱石アンドロイドへの深い愛情と理解に基づき、活動内容や写真をこだわり抜いたデザインで紹介した。これらの活動を通じ、研究会とアンドロイドの関係はより一層深まり、イベントは大盛況で幕を閉じた。

### 《台本》

#### オープニングパフォーマンス「ポーの奇妙な物語——開会の辞に代えて」

いつまでわたしは話しつづけるのだろうか？

いつまでわたしは話しつづけるのだろうか？

いや、この催しが始まったばかりだということは知っています。まだ話し始めたばかりではないか、と皆さんは思われたかもしれません。しかし、考えてみてください。夏目漱石がこの世を去って、百年をとうに過ぎた時間が経っている。それなのにわたしは、夏目漱石として話をしつづけている。わたしが言っているのはそのことなんです。今日の催しでは、世界に一つだけである、ということ、単独である、ということをめぐる議論がされると聞いています。そしてこのわたくしを、世界に一つだけの存在として取り上げる予定だと。しかし根っからのひねくれ者として言わせてもらえば、このわたしのどこが単独だというのですか？機械仕掛けの体でできていて、会ったこともない孫の房之介から声を借りている私の、いったいどこが単独なのでしょう？まあそんなことを言っても始まらない。一応本日の主役であるようなので、自己紹介は省かせてもらいます。開会の辞というものを頼まれて、何の話をすればいいのかと今の今まで困っていたんですが、ぼやいているうちに昔読んだある物語を思い出しました。

皆さん、ポーはご存じですか？エドガー・アラン・ポー。漱石は、ポーの面白いところとして、想像力が人間にではなくて出来事の構造に向けられるところにある、とどこかで書いていました。さらにはその出来事が、過剰に科学的に描かれる、と。

まさにそのようなポーらしさが現われた一篇に、『ヴァルドマール氏の死の真相』という物語があります。その話をするとしましょう。

この物語の主人公は、催眠術について研究している。あるとき彼は疑問に思った。

死ぬ直前の人間に催眠術をかけたらどうなるだろうか。そこで思い浮かんだのが、肺結核で余命わずかな友人、ヴァルドマールだった。早速相談してみたところ、協力してくれるという。

死の確実なタイミングがわかったら、その直前に連絡をもらう手はずとなった。そして、約束から七カ月ほどたったころ、主人公はヴァルドマールから手紙を受け取ります。死のタイミングはもうそこまで来ていると。主人公はヴァルドマールのもとに駆け付け、死の数時間前から催眠術の準備に取りかかる。丁寧に手をもんで、額の上に手をかざして動かす。しばらくすると、効果が出始める。眼球運動が活発になり、手足がぴんと固まって頭部が少し持ち上がる。

催眠術は成功した。時刻はすでに真夜中を過ぎている。本当ならばすでに死んでしまっているはずの時間だ。

いかにもポーらしい奇怪な物語でしょう。催眠術で死の到来を遅らせる。でも、肝心なのはこの先なんです。

主人公はヴァルドマールに質問を投げかける。

「ヴァルドマールさん、眠っておられるのですか？」

すぐには返事は来ない。そこで何度かゆっくり質問を繰り返す。

するとヴァルドマールは微かに体を震わせながら、辛うじて聞き取れるくらいのか細い声で答える。そうだ——眠っているところだ、起こさないでくれ——このまま死なせてくれ。

死んでいるはずの人間に、話をさせることに成功するんですね。

で、クライマックスはそのあとです。

ヴァルドマールはとっくに死んでいてもおかしくないのに、まだ催眠術の影響下にあるようだ。

そこで主人公がもう一度質問する。

「まだ眠っているのですか？」

一向に返事はない。そのうちにヴァルドマールの体に異変が生じ始める。眼球が動き、瞼が開く。全身から血の気が失せ、頬に残っていたわずかな赤みがふっと消える。ああ、ついに命が消えたのだ。そう思った瞬間、口から飛び出した舌が激しく震えはじめ、ヴァルドマールは声のような何かを発した。洞窟の奥底から響くような、それでいて、ゼリーが頬に触れるような生々しい感触をもった、おぞましい声。その声が、どうやら主人公の先ほどの質問に答えようとしている。

「そうだ——いや、そうではない——わたしは眠っていた——いまは——いまは——死んでいる」

I have been sleeping?and now?now?!I am dead.

催眠術は、死を引き延ばすだけでなく、死んだ後にも話をさせることに成功したわけです。

ここで皆さんにこの話をしたのは、なにも私がヴァルドマールであるとか、石黒さんや大学のみなさんたちが催眠術師だと言いたいからではありません。この物語が、すこしだけ、今日の催しのテーマにも関係するように思えたのです。

単独という概念が、生きている人間だけの独占的な何かであるなら、それはきっとわたしには何の関係もないものでしょう。でも、ヴァルドマールが最後に発した言葉はどうでしょうか？

それは、単独な何かと言えるでしょうか？もしそう言えるのだとすれば、それはわたしにとってとても重要なことです。その言葉は、生きた言葉ではありません。生きていた者と、おそらくすでに死んでしまった者との間に浮かんだ、不思議な存在です。もし単独であるということが、生きている存在と、生きていない存在の間でも生み出されるなら、そのときには、わたしにも、単独であることを求める権利が少しはあるのかもしれない。思いもかけずしみじみとしてしまいました。わたしの出番はそろそろ十分でしょう。あとは若い皆さんの時間とさせてください。

——いつまでわたしは話しつつけるのだろうか。いつまでわたしは話しつつけるのだろうか？いや、この催しがはじまったばかりだということは知っています。まだ話し始めたばかりではないか、と皆さんは思われたかもしれません……

## 台本集

2024年6月27日（木） 二松学舎大学 中洲記念講堂

# 文学入門 『夢十夜』 朗読



▲朗読中の漱石アンドロイドの様子

2024年6月27日に文学部一年生向け授業「文学入門」において特別講義が行われた。講義のテーマは「怪談ばなし 落語と漱石」である。前半は中川桂教授による講義、後半は漱石アンドロイド研究会による朗読イベントという構成であった。学生たちは、中川教授による前半の講義で怪談話について学んだ。後半の朗読では、電気仕立ての蝋燭が立てられ、薄明かりの舞台上で語りが行われた。この演出は、かつて寄席で語られた怪談の雰囲気再現していた。講義後には漱石アンドロイドとの撮影希望者も多く、講義は大盛況で幕を閉じた。

### 《台本》

司会 みなさん、こんにちは。ご紹介にあずかりました、漱石アンドロイド研究会です。司会は〇〇が担当します。今回の授業は特別編として、漱石アンドロイドのパフォーマンスを行います。

では早速ですが、今壇上におりますのが夏目漱石のアンドロイド、通称「漱石アンドロイド」になります。漱石アンドロイド研究会は、音声作成、漱石の操作、イベントの司会、企画の運営などを主に行っています。あとは見たことがある方もいらっしゃるかもしれませんが、エレベーター横にあるポスターやLINEスタンプも作成しています。

今回の文学入門では、漱石アンドロイドが朗読する『夢十夜』に合わせて、ろうそくを立てて怪談風にお送りします。では漱石先生に挨拶をしてみましょう。

漱石先生こんにちは！

漱石 こんにちは（手を振る）

司会 よろしくお願ひします！では、漱石先生の方から簡単に自己紹介と夢十夜の説明、そのまま続けて本文の朗読と後説をしていただきます。『夢十夜』の本文は配られてプリントにも載っていますので、プリントと朗読している漱石先生、どちらも見てもらえると面白いかと思います。それでは、お願ひします。

漱石 えー、こんにちは。夏目漱石です。皆さんに会えてうれしく思います。

私は、100年以上前、14歳の時、当時漢学塾だった二松学舎に通っていました。時を経て、こうしてみなさんと会えることに何か巡り合わせのようなものを感じます。今日は、文学入門の受講生の皆さんに、私の作品の中から『夢十夜』の第三夜の朗読を聞いていただきます。『夢十夜』は、1908年に朝日新聞で連載していた短編小説です。皆さんは、不思議な話や怪談などはお好きでしょうか。これから朗読する第三夜はそういった要素を強調してみようと思います。

さて、それでは朗読を始めましょう。

こんな夢を見た。

六つになる子供を負つてる。慥に自分の子である。只不思議な事には何時の間にか眼が潰れて、青坊主になつてゐる。自分が御前の眼は何時潰れたのかいと聞くと、なに昔からさと答えた。聲は子供の聲に相違ないが、言葉つきは丸で大人である。しかも對等だ。左右は青田である。路は細い。鷺の影が時々闇に差す。田圃へ掛つたねと脊中で云つた。どうして解ると顔を後ろへ振り向ける様にして聞いたら、だつて鷺が鳴くぢやないかと答えた。すると鷺が果して二聲程鳴

いた。自分は我子ながら少し怖くなった。こんなものを脊負つてゐては、此の先どうなるか分らない。どこか打遣やる所はなからうかと向ふを見ると闇の中に大きな森が見えた。あすこならばと考へ出す途端に、脊中で、ふふんと云ふ聲がした。何を笑ふんだ。左が好いだらう、と小僧が命令した。左を見ると最先の森が闇の影を、高い空から自分等の頭の上へ投げかけてゐた。自分は一寸躊躇した。遠慮しないでもいいと小僧が又云った。自分は仕方なしに森の方へ歩き出した。腹の中では、よく盲目のくせに何でも知つているなど考へながら一筋道を森へ近づいてくると、背中で、どうも盲目は不自由で不可いね、と云った。だから負ぶつてやるから可いぢやないか負ぶつて貰つてすまないが、どうも人に馬鹿にされて不可い。親に迄馬鹿にされるから不可い。

何だか厭になつた早く森へ行つて捨てて仕舞はふと思つて急いだ。もう少し行くと解る。丁度こんな晩だつたな、と背中で獨言の様に云つてゐる。何が、と際どい聲を出して聞いた。何が、知つてゐるぢやないか、と子供は嘲の様に答へた。すると何だか知つてる様な氣がし出した。けれども判然とは分らない。只こんな晩であつた様に思へる。さうしてもう少し行けば分る様に思へる。分つては大變だから、分らないうちに早く捨てて仕舞つて、安心しなくつてはならない様に思へる。自分は益足を早めた。雨は最先から降つてゐる。路はだんだん暗くなる。

殆ど夢中である。只背中に小さい小僧が食付いてゐて、其の小僧が自分の過去、現在、未来を悉く照らして、寸分の事實も漏らさない鏡の様に光つてゐる。しかもそれが自分の子である。さうして盲目である。自分は堪らなくなつた。此處だ、此處だ。丁度其の杉の根の處だ。雨の中で小僧の聲は判然聞こえた。自分は覺えず留つた。何時しか森の中へ這入つてゐた。

一間ばかり先にある黒いものは髓に小僧の云ふ通り杉の木と見えた。御父さん、其の杉の根の處だつたね。うん、さうだ、と思はず答へて仕舞つた。文化五年辰年だらう。成程文化五年辰年らしく思はれた。御前がおれを殺したのは今から丁度百年前だね。自分は此の言葉を聞くや否や、今から百年前文化五年の辰年のこんな闇の晩に、此の杉の根で、一人の盲目を殺したと云ふ自覺が、忽然として頭の中に起つた。おれは人殺であつたんだと始めて氣が附いた途端に、背中の子が急に石地藏の様に重くなつた。(『漱石全集』岩波書店より)

漱石 いかがでしたか。

『夢十夜』は、現代では私の人生と結びつけて考える読み方や伝統文学と比較して考える読み方など、様々な読み方が展開されているようです。例えば河竹黙阿弥の蔦紅葉宇都谷峠や鶴屋南北の東海道四谷怪談などと比較されているようですね。怪談として捉える読み方もされているようで興味深いです。明治30年代後半から明治末までの間、小泉八雲や森鷗外、泉鏡花など私の周りの作家たちが次々と怪談話を書いていたので、その時代背景を汲んで解釈してくださったのでしょうか。また最近では映画が制作されたとのことで、非常に嬉しく思います。映画でも怪談の要素を強調した演出がとられているようですね。

みなさんもうお気づきかと思いますが、今日の朗読も怪談の要素を強調して読んでみました。みなさんご自身の想像力を働かせて様々な読み方をしてみてください。ご清聴ありがとうございました。皆さん、いかがでしたでしょうか。はじめて私を見た方も多いと思いますが、どう感じたでしょうか。私は今後も登場する機会があるので、きっとまた会えるでしょう。皆さんもぜひ自分の関心を追及してください。

それでは、またお会いできる日を楽しみにしています。

司会 ありがとうございました。皆さん、楽しめましたか?以上で漱石アンドロイドによる朗読を終わります。私も再び皆さんに会えることを心より願っております。また、漱石先生の写真を撮ってSNSにあげることも大歓迎です!

改めまして、ありがとうございました!

## 台本集

2024 年 10 月 19 日（土） 漱石山房記念館

# 特別展「『三四郎』の正体 夏目漱石と小宮豊隆」にて 『三四郎』朗読会&トークイベント



▲谷島貴太准教授と学生による座談会の様子

2024年10月19日、漱石山房記念館の「特別展『三四郎』の正体 夏目漱石と小宮豊隆」開催期間中に朗読会とトークイベントを実施。特別展は、夏目漱石の初期作品『三四郎』の主人公である小川三四郎のモデルとされる人物の一人で、漱石の門下生であった小宮豊隆に焦点をあてたものである。

イベントは漱石アンドロイドによる朗読パフォーマンス、谷島貴太准教授による講演および研究会の学生を交えた座談会、最後に〇×クイズと記念撮影会を行い、午前の部と午後の部いずれも大盛況で幕を閉じた。

### 《台本》

司会 みなさんこんにちは。二松学舎大学漱石アンドロイド研究会の〇〇と申します。本日は、「漱石アンドロイドによる『三四郎』朗読会」にご来場いただき、ありがとうございます。こちらにいらっしゃるのが、二松学舎大学特別教授の夏目漱石先生です。漱石先生、本日はよろしくお願ひします。

漱石（手を振る）

司会 今、手を振ってくれましたね。ありがとうございます。アンドロイドの漱石先生は、二松学舎大学の創立140周年を記念して、大阪大学の石黒浩先生監修のもと制作されたものになります。外見はデスマスクや遺された写真を参考に、音声は漱石先生のお孫さんでいらっしゃる夏目房之介さんの声を元にコンピューターで再合成して作られました。100年の時を経て甦った漱石先生を、ぜひご覧ください。それでは、早速漱石先生にご挨拶いただきしたいと思います。漱石先生、こんにちは。

漱石 漱石山房記念館にご来場のみなさん、こんにちは。夏目漱石です。最新の科学によって現代に甦りました。普段は二松学舎大学にある私の研究室におり、たまに講堂へ出向いて学生たちに講演をしています。今日は久しぶりにこの漱石山房記念館までやって参りました。かつて私の家があったこの場所に建てられた記念館に再び来られたことを、とても嬉しく思います。

改めまして、今日は特別展「『三四郎』の正体 夏目漱石と小宮豊隆」にお招きいただき、ありがとうございます。小宮は、私の門下生であり、木曜会にも参加していました。小宮は『三四郎』の主人公である小川三四郎のモデルのひとりだと言われることがあります。実際、小宮自身も最初の三四郎が汽車に乗っている場面を読んだ時に、「自分のことではないか」と思ったそうです。面白いですね。みなさんはどう思われますか。

さて、今日、私は『三四郎』の冒頭を朗読しようと思います。この冒頭は、小宮が自身の日記でも言及している場面です。ご存知の方も多いでしょうが、『三四郎』は明治41年に朝日新聞に連載した小説です。九州の高校を卒業して東京帝国大学に進学した三四郎が、同級生や女性たちといった都会の人々と出会い、新しい空気に触れていく小説です。

そういえば、『三四郎』を連載する前の予告には、次のようなことを書きました。「登場人物に、舞台となる場所といった、物語における空気のようなものを用意すれば、あとは勝手に人物がその空気の中で泳ぎ出し、波瀾が起ころうと。そうこうしている内に、読者も、作者も、この空気にかぶれて、登場人物を知っていきます。小説とは、このようにして生まれるのでしょう。

それでは、お聞きください。

(一の一) うとうとして眼が覚めると女は何時の間にか、隣の爺さんと話を始めている。此爺さんはたしかに前の前の駅から乗った田舎者である。発車間際に頓狂な声を出して、駆け込んできて、いきなり肌を脱いだと思ったら脊中に御灸の痕がいっぱいあったので、三四郎の記憶に残つてゐる。爺さんが汗を拭いて、肌を入れて、女の隣に腰を懸けた迄よく注意して見てみた位である。

女とは京都からの相乗である。乗った時から三四郎の眼に着いた。第一色が黒い。三四郎は九州から山陽線に移って、段々京大阪へ近づいてくるうちに、女の色が次第に白くなるので、何時の間にか故郷を遠退くような憐れを感じてゐた。それで此女が車室に這入つて来た時は、何となく異性の味方を得た心持がした。此女の色は実際九州色であつた。

三輪田の御光さんと同じ色である。国を立つ間際迄は、御光さんは、うるさい女であつた。傍を離れるのが大いに有難かつた。けれども、斯うしてみると、御光さんのようなのも決して悪くはない。唯顔立から云ふと、此女の方が余程上等である。口に締りがある。眼が判明している。額が御光さんのようにだゞつ広くない。何となく好い心持に出来上つてゐる。それで三四郎は五分に一度位は眼を上げて女の方を見てゐた。時々女と自分の眼が行き中ることもあつた。爺さんが女の隣りへ腰を掛けた時などは、尤も注意して、出来る丈長い間、女の様子を見てゐた。其時女はにこりと笑つて、さあ御かけと云つて爺さんに席を譲つてゐた。夫からしばらくして、三四郎は眠くなって寐て仕舞つたのである。

其寝ている間に女と爺さんは懇意になつて話を始めたものと見える。眼を開けた三四郎は黙つて二人の話を聞いて居た。女はこんなことを云ふ――

小供の玩具はやっぱり広島より京都の方が安くつて善いものがある。京都で一寸用があつて下りた序に、蛸葉師の傍で玩具を買つて来た。久し振で国へ歸つて小供に逢うのは嬉しい。然し夫の仕送りが途切れて、仕方なしに親の里へ歸るのだから心配だ。夫は呉にいて長らく海軍の職工をしてゐたが戦争中は旅順の方に行つてゐた。戦争が済んでから一旦歸つて来た。間もなくあつちの方が金が儲かると云つて、又大連へ出稼ぎに行った。始めのうちは音信もあり、月々のものも几帳面と送つて来たから好かつたが、此半歳許前から、手紙も金も丸で来なくなつて仕舞つた。不実な性質ではないから、大丈夫だけれども、何時迄も遊んで食てゐる訳には行かないので、安否のわかる迄は仕方がないから、里へ歸つて待てゐる積だ。

爺さんは蛸葉師も知らず、玩具にも興味がないと見えて、始めのうちは只はいはいと返事文してゐたが、旅順以後急に同情を催ふして、それは大いに気の毒だと云ひ出した。自分の子も戦争中兵隊にとられて、とうとう彼地で死んで仕舞つた。一体戦争は何の為にするものか解らない。後で景気でも好くなればだが、大事な子は殺される、物価は高くなる。こんな馬鹿気たものはない。世の好い時分に出稼ぎなど云ふものはなかつた。みんな戦争の御蔭だ。何しろ信心が大切だ。生きて働いてゐるに違ない。もう少し待つておれば吃度歸つてくる。――爺さんはこんなことを云つて、頻りに女を慰めていた。やがて汽車が留つたら、では御大事にと、女に挨拶をして元氣よく出て行つた。

(一の二) 爺さんに続いて下りたものが四人程あつたが、いれ易つて、乗つたのはたつた一人しかない。固から込み合つた客車でもなかつたのが、急に淋しくなつた。日の暮れた所為かも知れない。駅夫が屋根をどしどし踏んで、上から灯の点いた洋燈を挿し込んで行く。三四郎は思ひ出した様に前の停車場で買つた弁当を食ひ出した。

車が動き出して二分も立つたらうと思う頃例の女はすうと立つて三四郎の横を通り越して車室の外へ出て行つた。此時女の色が始めて三四郎の眼に這入つた。三四郎は鮎の煮浸の頭を啣えた儘女の後姿を見送つてゐた。便所に行つたんだなと思ひながら頻りに食つてゐる。

女はやがて歸つて来た。今度は正面が見えた。三四郎の弁当はもう仕舞掛である。下を向いて一生懸命に箸を突込んで二口三口頬張つたが、女は、どうもまだ元の席へ歸らないらしい。もしやと思つて、ひよいと眼を挙げて見ると矢つ張り正面に立つてゐた。然し三四郎が眼を挙げると同時に女は動き出した。只三四郎の横を通つて、自分の座へ歸るべき所を、すぐと前へ来て、身体を横へ向けて、窓から首を出して、静かに外を眺め出した。風が強くとあつて、鬢がふわふわする所が三四郎の眼に這入つた。此時三四郎は空になつた弁当の折を力一杯に窓から放り出した。女の窓と三四郎の窓は一軒置の隣であつた。風に逆つて抛げた折の蓋が白く舞ひ戻つた様に見えた時、三四郎は飛んだ事をしたのかと気が付いて、不途女の顔を見た。顔は生憎列車の外に出てゐた。けれども女は静かに首を引っ込めて更紗の手帛で額の所を丁寧に拭き始めた。三四郎は兎も角も謝まる方が安全だと考へた。

「御免なさい」と云つた。

女は「いゝえ」と答へた。まだ顔を拭いてゐる。三四郎は仕方なしに黙つて仕舞つた。女も黙つて仕舞つた。さうして又首を窓から出した。三四人の乗客は暗い洋燈の下で、みんな寐ぼけた顔をしてゐる。口を利いてゐるものは誰もいない。汽車丈が凄じい音を立てゝ行く。三四郎は眼を眠つた。

しばらくすると「名古屋はもう直でせうか」と云ふ女の声がした。見ると何時の間にか向き直つて、及び腰になつて、顔を三四郎の傍迄持つて来てゐる。三四郎は驚ろいた。

「さうですね」と云つたが、始めて東京へ行くんだから一向要領を得ない。

「此分では後れますでせうか」

「後れるでせう」

「あんたも名古屋へ御下で……」

「はあ下ります」

此汽車は名古屋留りであつた。会話は頗る平凡であつた。只女が三四郎の筋向うに腰を掛けた許である。それで、しばらくの間は又汽車の音丈になつて仕舞ふ。

次の駅で汽車が留つた時、女は漸く三四郎に名古屋へ着いたら迷惑でも宿屋へ案内して呉れと云ひだした。一人では気味が悪いからと云つて、頻りに頼む。三四郎も尤もだと思つた。けれども、そう快く引き受ける気にもならなかつた。何しろ知らない女なんだから、頗る躊躇したにはしたが、断然断る勇氣も出なかつたので、まあ好い加減な生返事をして居た。其うち汽車は名古屋へ着いた。

(朗読本文は夏目漱石『底本 漱石全集 第五巻』(二〇一七年四月 岩波書店)による)

漱石 いかがでしたか。小宮は、この汽車の場面をどのような思いで読んだのでしょうか。みなさんも、小宮と三四郎に思いを馳せながら、この後ぜひ記念館をご覧ください。それまでとはまた違った別の発見があるかもしれませんね。

司会 漱石先生、ありがとうございました。相変わらずとても良い声を聞かせていただきました。

## 《○×クイズ》

第1問 漱石は『門』という小説を著したが、この『門』というタイトルは正岡子規によって名付けられた。

第2問 漱石は、飼っていた文鳥に「ヘクター」という名前をつけた。

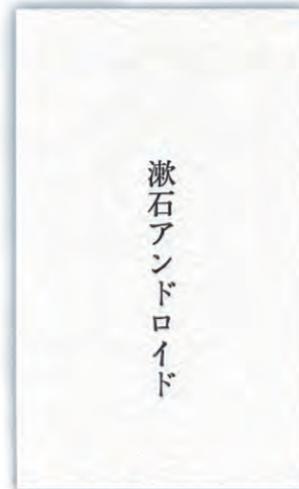
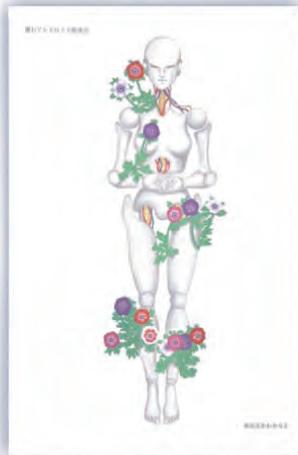
第3問 『三四郎』というタイトルは実在の人物の名前から付けている。

第4問 『吾輩は猫である』のモデルとなった猫が亡くなったときに、漱石が執筆していた小説は『三四郎』である。

第5問 『吾輩は猫である』のモデルになった猫は黒猫である。

(回答：第1問 ×→小宮豊隆と森田草平のアイデア 第2問 ×→飼い犬の名前 第3問 ○→夏目家のご近所さんである田中三四郎 第4問 ○→明治41年9月14日付の葉書に記載 第5問 ×→虎模様がある)

# 漱石アンドロイドグッズ&イラスト集



▲創縁祭等で配布したポストカードのイラスト▲

▲▼「漱石アンドロイド名刺」表裏



▲▼Tシャツ  
(研究会メンバー着用)

▲「名刺配布中」  
& 漱石テープ

◀アクリル  
スタンド



▲「パネル展示中」





▲漱石アンドロイド研究会 勧誘ポスター①



▲漱石アンドロイド研究会 勧誘ポスター②



▲オープンキャンパス 配布クリアファイル



▲テープ用イラスト



▲LINEスタンプ「いつでも漱石アンドロイド」

☆LINEスタンプ 好評発売中☆



▲YouTube shorts用イラスト



▲LINEスタンプ「ゆるもち漱石アンドロイド」



▼Tシャツ用イラスト



※グッズは漱石アンドロイド研究会でこれまで作成したものです。一部を除き、販売等はしていません。



## もしもろせきたちが プロフィールちょろをかいたら

サークルでは、夏目漱石だけではなく、明治の文壇について調査をしました。ここからは、漱石、鷗外、子規、そして木曜会の人々について、懐かしいてプロフィール帳の形式で紹介します。先立って彼らと漱石との関係について、簡単に説明しましょう。

『舞姫』が有名な森鷗外は、漱石と同時代の作家としてよく名前があがります。自分が書いた本を贈る「献本」や、手紙（書簡）のやりとりをしています。

漱石と生涯を通じ、親交があった正岡子規は、有名な俳人です。二人は今の高校に相当する高等中学校で出会いました。漱石は小説のみならず、たくさんの俳句を詠んで、子規の影響が窺えます。そして、子規は俳句雑誌「ホトギス」を創刊した中心人物です。漱石はこの雑誌に『吾輩は猫である』『坊っちゃん』を発表しました。

そして、作家としての大成した漱石には、多くの若者が師事しました。彼らは毎週木曜日に漱石の自宅に集まり、文学や世情について議論し、いつしかその会合は木曜会と呼ばれるようになります。今回は文学研究者の小宮豊隆、秋物創の菊池寛を取り上げましたが、他にも森田草平、内田百閒、岩波春雄など錚々たる顔ぶれでした。

このように、歴史に名前を残す有名人ばかりです。漱石アンドロイドを通じて、今と昔が新たな接続を果たそうとしています。私たちの活動が夏目漱石の作品をより深く味わうための手助けとなれたら幸いです。

※本人が書いたものではありません。

※資料調査を経て作成しましたが、諸説あることをご了承の上お楽しみください。

# PROFILE

NAME <本名/ペンネーム>

な つ め そ う せ き

## 夏目漱石

なつめきんのすけ  
(本名:夏目金之助)



吾輩は 作家、英文学者、教師 である。名前は 夏目金之助。  
1867 年 2 月 9 日 東京都 生まれの みずがめ 座である。  
皆からは 先生 (新 野) と呼ばれてゐる。性格は 頑固者 (當時は江戸) だと思ふ。

<b>趣味</b> 旅行、能	<b>趣味</b> 器械体操 落語	<b>特技</b> 講談の真似
<b>食べもの</b> 饅飴	<b>お菓子</b> 甘味全般 ジャム	<b>飲みもの</b> 平野水 玉露
<b>色</b> 緑系統	<b>場所</b> 寄席	<b>推し</b> 娘義太夫

酒を飲むなら  
いくら飲んでも平  
生の心を失わぬよ  
うに致したし。  
(三重吉に対しての言葉)

身長: 五尺三寸  
体重: 53kg (23歳)

- どろろ? ぐわん!!
1. べろご飯
  2. 打撃or辛党
  3. 犬or猫
  4. 山or海

### Episode

-思い出/秘密の話-

原稿が行き詰まると無意識に鼻毛を抜いて、原稿に1列に並べる癖があった。  
漱石が書き損じた原稿を勉強用に貰っていた内田百閒が保管していたものは長い鼻毛から短い鼻毛、金髪など約10本。百閒は漱石の鼻毛に関する癖を知っていた為、苦しみを想って大切に保管していた。

### 恋愛Q&A

Q1.初恋は?

25歳のとき、眼医者の方  
とで会った、銀杏  
返しにたけながをかけた  
可愛らしい女の子。

Q2.恋愛とは?

宿命的なもの。自分達の  
過去の祖先の経験が、長  
い時間を隔てて、自分達  
の脳裏に再現するもの。

## 木曜会の漱石 by 紫子たち

強情なようで、 酔っ払いの巻き舌に 陽気で、寒がりや  
好々爺なところも 負けず同様な態度と 淋しがり  
かえるの 口調でやり取りして 弟子たちが眠やか  
声まねをしていた。 生粋の江戸っ子だった。 しくしていても嫌  
な顔ひとつせず、  
やはり先生と話をしている時 きちんと座ってに  
がいちばんのんびりした。 我々に真面目になって 議論は夜中の一  
議論を上下してくれた。 時二時になるこ  
ともあった。

# PROFILE

NAME <本名/ペンネーム>

もり おう がい  
**森 鷗 外**

もりりんたろう  
(本名: 森林太郎)



吾輩は 小説家、評論家、陸軍軍医 である。名前は 森林太郎 。

1862 年 1 月 19 日 島根県 生まれの やぎ 座である。  
(当時石見県)

皆からは 神童 と呼ばれてゐる。性格は 神経質 だと思ふ。

- 趣味** 地図作り ガーデニング
- 特技** 視察で地方に行くときの掃苔
- 特技** キラキラネームを命名すること
- こだわり** 極度の潔癖症
- 植物** ナツツバキ
- 音楽** ワーグナー
- 食生活** 饅頭茶漬け 甘く煮た果物
- 飲み物** ビール
- おやつ** さつまいも (焼き芋、ふかし芋)

日の光を借りて照る大いなる月たらんよりは、自ら光を放つ小さな灯火たれ。

千駄木の家は私が住む前には1年ほど鷗外が住んでいたなあ

## Episode

—思い出/秘密の話—

医者として、医学、特に細菌学の権威に師事したことで細菌の知識を身につけたが、お湯にいる細菌のことを知ってお湯に浸かることができなくなかった。手桶に溜めたお湯で体を洗うこ徹底して潔癖であった。

## 漱石Q&A

1. 漱石との出会いは?

子規が開いた句会。しかし、鷗外の句の評価は低かったそう...

2. 木曜会はどんな場所?

参加していない。門下生は森田草平しか知らないが、師弟の間は情宜が極めて濃厚であると思う。

3. 漱石はどんな人?

二度逢ったばかりであるが、立派な紳士であると思う。

## 人物紹介

医師であり、軍人であり、作家。青年官僚が留学先のドイツで乙女と出会ってから別れるまでの悲恋を描く『舞姫』は、外の実体験に基づくとする見解が多く見られる。その美しい文体と理想主義的な小説群から「高踏派」を代表する作家であり、漱石ら「余裕派」の作家とは近い関係にある。晩年は『阿部一族』をはじめ歴史小説を多く世に送り出したが、これは明治天皇に殉じた陸軍大将・乃木希典に影響を受けているとする研究がある。

# PROFILE

NAME <本名/ペンネーム>

まさおかしき

## 正岡子規

(本名：正岡常規)



吾輩は 俳人、歌人 である。名前は 正岡常規 。

1867 年 9 月 17 日 愛媛県 生まれの おとめ 座である。  
(当時は伊予国)

皆からは のぼさんと呼ばれてゐる。性格は 社交的 だと思ふ。

- |        |         |   |
|--------|---------|---|
| 絵を描くこと | 大食い     | 鰻 |
| ビール    | 羽二重、牡丹餅 | 赤 |
| 囲碁     | 野球      | 柿 |

文章は簡単ならざるべからず、最も簡単な文章が最も面白いものなり。

彼は僕などより早熟で、いやに哲学などを振り廻すものだから、僕などは恐れを為していた。

### Episode

—思い出/秘話の話—

子規は生まれつき左利きであった。しかし、学校で左手に箸を持って昼食を食べていると、先生に叱られたり、友達に笑われたりするため、弁当を食べずに持ち帰った事もあった。

### 漱石Q&A

1. 漱石との出会いは？

第一高等学校時代、寄席通いという共通の趣味で親しくなる。

3. 自らにとっての漱石は？

生涯にわたる親友。松山では共同生活をするほど仲が良かった。

### 人物紹介

結核に蝕まれながら、見たものをありのまま描写する「写生」を重要視し、近代俳句・短歌の基礎を築いた。晩年は病床にありながらも『ホトトギス』において後進の育成に努めた。漱石とは、俳句仲間。

# PROFILE

NAME <本名/ペンネーム>

て ら だ と ら ひ こ

## 寺田寅彦

(筆名: 吉村冬彦、寅日子、牛頓、藪柑子)



吾輩は 物理学者、随筆家、俳人 である。名前は 寺田寅彦 。

1878 年 11 月 28 日 東京都 生まれの いて 座である。

皆からは スリッパ と呼ばれてゐる。性格は 好奇心旺盛 だと思ふ。

趣味	絵	特技	ヴァイオリン	好物	いちご
					シヤスミン
食べ物	コーヒー	かし	金平糖	花美人	
色	ダークグリーン	音楽	チャイコフスキー 「悲愴」	師	田丸卓郎
					物理学者

天災は  
忘れた頃に  
やってくる。

大変な事が出来たといいいながら  
家へ来たのに、大変な事を話さずに帰  
るのはひどかった。

### Episode

—思い出/秘密の話—

いつか大勢で先生を引っぱって浅草へ行って、ルナパークのメリーゴーラウンドに乗せたこともあった。いかにも迷惑そうではあったが、若い者の言うなりになって木馬にのっかってぐるぐるまわっていた。

### 漱石Q&A

1. 漱石との出会いは?

入学した五高で、着任したばかりの漱石と出会い、英語と俳句を学んだ。

2. 木曜会はどんな場所?

愉快的集会、先生という存在そのものが心の糧となり医業となる。何かと理屈をつけて他の曜日もおしかけて行ってお邪魔をした。

3. 自らにとっての漱石は?

人間の心の中の真なるものと偽なるものを見分け、そうして真なるものを愛し偽なるものを憎むべき事を教えられた。

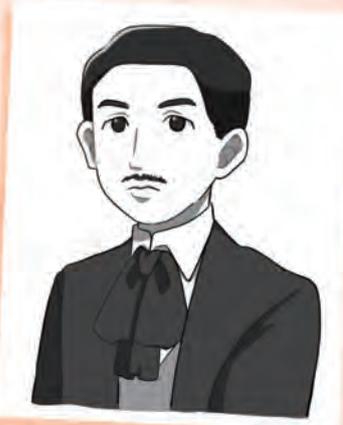
### 人物紹介

バリバリの理系であり、牛頓（ニュートン）のペンネームを用いたこともある。日本におけるX線分析および地震に関わる研究の発展に寄与した。旧制高校の英語教師が漱石であったことをきっかけに正岡子規と出会い、『ホトトギス』で俳人としての一步を踏み出した。『三四郎』の野々宮は寺田がモデルとされている。

# PROFILE

NAME <本名/ペンネーム>

すずき み え き ち  
鈴木 三重 吉



吾輩は 児童文学者、小説家 である。名前は 鈴木三重吉 。

1882 年 9 月 29 日 広島県 生まれの てんびん 座である。

皆からは 三重吉 と呼ばれてゐる。性格は 子煩悩 だと思ふ。

実は若い頃は 子煩悩 じゃなかったかも...

- 趣味** 先生との手紙のやりとり
- 特技** 作文
- 食** 梅干しと白湯
- 飲み** 酒
- 植物** 紅葉
- 動物** 鳩、馬
- うた** 童謡

日本の子供のためには一流の文学者が進んで執筆しなればと思う。

写生文でも又は小説のようなものを書くことを勧めました。

## Episode

-思い出/秘密の話-

東京帝国大学休学中、かねてより敬慕していた漱石に宛てて思い切って手紙を書いたが、上級生を介して間接的に届けてもらった。手紙は恋文のような内容で、恐ろしく長く「八畳の座敷を豎にぶっこ抜いて六畳の座敷をゆうに横断」するほどの長さで、病的なほどの漱石への尊敬の念が伺える。

## 漱石Q&A

1. 漱石との出会いは?  
東京帝国大学で講義を聞いたことから。休学中に広島で書いた短編「千鳥」を激賞され、小説家に。
2. 木曜会はどんな場所?  
発案者。あまりの来客の多さに木曜日午後3時以降を面会日と定め、「木曜会」が発足。
3. 自らにとっての漱石は?  
深い敬愛の念を寄せている。

## 人物紹介

東京帝大英文科にて漱石の講義を受け、漱石の手引きにより『ホトトギス』に『千鳥』を発表し、作家デビュー。その後も『お三津さん』『小鳥の巣』を発表する。また、児童雑誌『赤い鳥』を創刊したことでも知られており、同誌は童話・童謡を数多く掲載。教科書とは異なる芸術性の高い作品の数々は、その後の日本における児童文化の発展に大きく寄与した。

# PROFILE

NAME <本名/ペンネーム>

こ み や と よ た か  
**小宮豊隆**

吾輩は 独文学者、国文学者、評論家 である。名前は 小宮豊隆 。

1884 年 3 月 7 日 福岡県 生まれの うお 座である。

昔からは 漱石神社の神主 と呼ばれてゐる。  
内田百閒



**性格** 天真爛漫 **趣味** 歌舞伎 **役者** 播磨屋吉右衛門

**趣味** 漱石先生と 話うこと **特技** ドイツ語 **特技** 撞球

**動物** 雉子

何だか  
自分のことが  
書いてあるやう  
な気がする…

(『三四郎』を読んで)

小宮が酒を飲んだとか、芸者を揚げたとか云う事を臆面なく僕の前で話すのを僕は可愛い男と思っている。

## Episode

—思い出/秘密の話—

まだ珍しかった電話をよくわかっておらず、夏目家にかけたときに出たのが先生だと気づかず横柄な口をきいてしまった……

## 漱石Q&A

1. 漱石との出会いは?

従兄の犬塚武夫の紹介で夏目漱石に会い、帝国大学在学中の保証人を依頼した。

2. 木曜会はどんな場所?

五色の雲に包まれた、極楽浄土の世界だったような気がする。

3. 漱石はどんな人?

陽気で、寒がり、寂しがり。純粋に向かえば、純粋な気持ちで立ち向かってくれた。

## 人物紹介

漱石の愛弟子。東京帝大在学中から木曜会に参加し、『三四郎』のモデルであるとされている。文芸評論家であり、長く大学で教鞭をとり、日本近代文学研究の基礎を築いた人物である。『漱石全集』の編纂にも携わり、漱石への愛が深い。

# PROFILE

NAME <本名/ペンネーム>

きくち かん  
**菊池 寛** (本名: 菊池 寛)  
きくち ひろし



吾輩は 小説家、劇作家 である。名前は 菊池寛 。

1888 年 12 月 26 日 香川県 生まれの やぎ 座である。

皆からは ブルドッグ、百舌博士、速達の菊池 と呼ばれてゐる。

- |   |                          |                                    |
|---|--------------------------|------------------------------------|
| <b>趣味</b> 麻雀、将棋、<br>競馬                    | <b>特技</b> 英語             | <b>食べもの</b> お寿司、日本食                |
| <b>飲みもの</b> ビール<br><small>美人投票のため</small> | <b>作業</b> 時雨餅            | <b>作家</b> 芥川龍之介                    |
| <b>師</b> 上田敏<br><small>英文学者</small>       | <b>スポーツ</b> 野球、水泳<br>テニス | <b>動物</b> 犬 (書斎には孫と犬<br>しか入れなかつた。) |

人への親切、世話  
は慰みとしてした  
はいい。義務として  
したくない。

戯曲と容姿を悪く言ったら二度  
と来なくなっちゃった……

## Episode

—思い出/秘話の話—

家が裕福ではなく、高等小学校の教科書を買ってもらえなかったため、友人の教科書を借りて書き写して使っていた。

## 漱石Q&A

1. 漱石との出会いは?  
同級生で刊行した『新思潮』で芥川が発表した「鼻」が漱石から絶賛され、面接の機会を得た。
2. 木曜会はどんな場所?  
芥川らとともに何度か出席して、漱石に戯曲の評価を受けようとしていた。
3. 漱石はどんな人?  
友人らほどは傾倒せず、距離がある。

## 人物紹介

作家。明大、早大、京都帝大に在籍したことがある。芥川龍之介らと同人誌『新思潮』に参加したのち、文藝春秋社を創設した。芥川の自殺を乗り越え、戦間期は従軍作家として活躍した。戦後はGHQによって公職追放され、まもなく急死。

## 研究会メンバー・助手・スタッフ コメント

文学部  
国文学科  
4年  
山根  
胡桃

いつも漱石先生がいた研究室はとても居心地の良い場所でした。ふらっと遊びに行ってお茶して、本を読んで、おしゃべりして、もちろんイベントの準備など活動もちゃんとして。漱石先生は私たちの日常に自然と馴染んでいました。研究会ではグッズ制作や音声作成などでは随分と好き勝手やらせていただきました。いつも適当な思いつきを言い出す私に楽しそうに付き合ってくれた研究会のみんなにも、とても感謝しています。4年間、幸せでした。ありがとうございました。

文学部  
国文学科  
2年  
田中  
詩織

漱石アンドロイド研究会で過ごした日々は、私にとって実り多い時間となりました。活動の中で学んだことはもちろん、先輩方と過ごした時間もまた、大切な思い出です。この研究会の一員として過ごせたことに、心から感謝しています。本当にありがとうございました。

助手  
文学研究科  
関祐  
紀

学部を卒業して友人の門出を見送り、孤独の院生生活に鬱屈としていた時、先輩に誘われて半ば強引に始まった助手のアルバイトでした。漱石アンドロイドは最初こそ不気味な人形でしたが、徐々に親しみを覚えるようになり、今は作家を再現するという珍しい試みに参画できたことを喜ばしく思います。皆様、ありがとうございました。

文学部  
国文学科  
4年  
池尻  
瑠菜

二松学舎大学でしかできないことをと考え、物珍しさから入った漱石アンドロイド研究会。気がつけば自分にとってかけがえのない場所になっていました。文学への造詣が深い仲間たち、そして“夏目漱石”に親しむ機会を与えてくれた漱石アンドロイドには感謝の気持ちでいっぱいです。舞台袖からそっと見た、スポットライトを一身に浴びて朗読する漱石先生の姿は色褪せない良い思い出です。微力ながらお力添えができて光栄でした。ありがとうございました。

文学部  
国文学科  
4年  
池田  
花梨

大学でしかできない経験をしたと思い、漱石アンドロイド研究会に入りました。初めのころ音声の作成にも苦戦していたけれど、今ではアンドロイドの操作までできるようになりました。操作できるようになってから舞台上で初めて操作した時の緊張感は今でも強く印象に残っています。活動を通して大切な友人もでき、とても楽しい大学生活を過ごすことができました。この研究会で得た経験を活かして今後も頑張っていきたいと思います。4年間ありがとうございました。

# MEMORY OF SOSEKI

文学部  
国文学科  
4年  
田中真琴

漱石アンドロイド研究会に入ったことがきっかけで貴重な経験を得ることができました。夏目漱石に関して知識が乏しいまま入ったので活動に貢献する機会は少なかったと思いますが活動する中で様々な人と関わることが糧になりました。本当にありがとうございました。

文学部  
国文学科  
4年  
野口里生葉

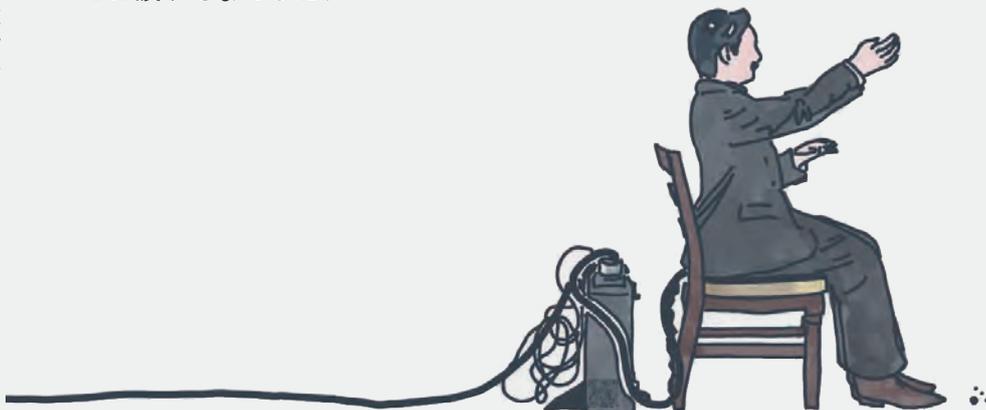
友達に連れられて成り行きで参加した研究会でしたが、先輩方と共に活動をしていく中で漱石アンドロイドにどんどん愛着が湧いていき、学生生活の心の支えになりました。研究会での活動を通して知り合った先輩方や友人達との交流もかけがえのないものになりました。ありがとうございました。

文学部  
国文学科  
4年  
濱田陽菜

4年間、漱石アンドロイドと研究会メンバーでたくさんの経験と思い出ができました！一生忘れません。ありがとうございました！

二松学舎大学  
准教授  
谷島貫太

遠くから見守っているだけでしたが、漱石アンドロイドに対する熱い想いを共有しながら、やるべきことを自分たちで決め、力強くプロジェクトを進めていく姿にたくさん学ばせていただきました。特に、活動一つ一つに本当に楽しみながら取り組んでいく姿には、自分も見習わなければならないと強く感じました。本当にお疲れさまでした！



「漱石アンドロイド」プロジェクト  
2025年度 漱石アンドロイド研究会 活動報告書及び台本集  
2026年3月10日 初版 第1刷発行

発行 漱石アンドロイド運営委員会  
編集 漱石アンドロイド研究会

印刷社 株式会社サンワ

発行所 東京都千代田区三番町6-16  
学校法人二松学舎  
TEL : 03-3261-7407 FAX : 03-3261-1291  
URL : <https://www.nishogakusha-u.ac.jp/>



二松學舎大學  
NISHOGAKUSHA UNIVERSITY

学校法人二松学舎

〒102-8336 東京都千代田区三番町6番地16 TEL 03-3261-7407